
売られた花嫁

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

売られた花嫁

【NZコード】

N3587F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

村の娘マジエンカ。結婚仲介人によつて思わぬ結婚話を出される。これに対して彼女の恋人イエニークは思わぬ行動に出るがこれが何と。スマタナが作曲したチョコのオペラを小説にしました。村での微笑ましい結婚での騒動です。こちらにも掲載してもらつています。

<http://www.paintwest.net/>

第一幕その一

第一幕 結婚仲介人

十九世紀中頃のボヘミア。時代は刻一刻と変わり世界は次第に忙しくなるとしていた。当時ここを勢力圏に置いていたオーストリアも例外ではなく民族運動を受けてオーストリア＝ハンガリー帝国という二重国家となつた。ハプスブルク家を頂点としながらもそれぞれの民族意識の高まりを抑え切れなくなりつつあった。そうした国家であつた。

その中でボヘミアは特別な位置にあつた。欧洲の丁度中央に位置するこの地域は古来より重要な場所とされてきたのである。

ドイツの宰相ビスマルクはこつ言つた。

「ボヘミアを制する者が欧洲を制する」

と。彼は一代の戦略家であり、それだけにその言葉は重みがあつた。

ここはチヒの中心地域であつた。美しき都プラハもあり農村はのどかで整つていた。人々はそこでゆつたりとした、それでいて朴素な生活を送つていたのである。

その中のある村での話である。今日は教会の聖別式である。春の訪れも同時に祝う日出度い日である。

人々は質素な造りの教会から出ると右手にある酒屋に入つていつた。そこでは恰幅のいい日那とおかみがもう笑顔で待つていた。

「いらっしゃい」

「飲んでくんどう」

「勿論だよ」

村人達は一人に笑顔でそう答えた。

「親父、席用意してくれ」

「おかみさん、ビールある?」

「ここにたんまりと」

「ソーセージは？」

「今茹で終わつたよ」

「チーズは？」

「切つて置いてあるよ。安くしどくからね」

こうして人々は酒屋の外と中で次々に卓を囲んだ。そして乾杯をはじめた。

「よし、飲むぞ！」

「おう！」

老いも若きも男も女も口々に酒を讃えながら飲む。皆笑顔に包まれていた。

しかしその中で一人浮かない顔をして入口のすぐ側にあるテーブルで座つている少女がいた。金髪で小柄な少女である。

青い瞳が非常に美しかつた。そして少し太めながらそれがかえつて健康的な可愛さとなつてあらわれていた。

ボヘミアの民族衣装に身を包んでいる。彼の前には同じくボヘミアの服を着た若者がいた。豊かな金色の髪に小粋な表情をした若者である。目は緑で少女の目が湖の様であるのに対して彼のそれはまるで森の様であつた。帽子には洒落た白い羽根が付けられている。

「マジエンカ、どうしたんだい」

彼はその少女に対して問つた。

「随分浮かない顔をして」

「うん」

マジエンカと呼ばれた少女はそれを受けて顔をあげた。あどけない顔が何やら憂いで沈んでいた。

「ねえイエニーク」

「何だい」

若者は名を呼ばれて応えた。

「私もそろそろ結婚していい年頃よね」

「うん」

この時代結婚する年齢は低かつた。マジエンカ程の年齢になると

もう結婚するのが普通であった。

「それですね。母さんに言われたの」

「誰かと結婚しろって？」

「ええ。それでもうすぐ家に結婚の仲介人さんがやって来るのこの時代この地域にはそうした職業もあったのだ。結婚の仲介を生業とする人達である。

「ふん、それで」

「どうしたらしいの！？私知らない人や嫌いな人と結婚なんかしたくないわ」

「安心して、マジエンカ」

イエニークはにこりと笑つてマジエンカに対してもう言つた。

「何で」

「よお

ここで周りの村人達が一人に声をかけてきた。

「美味しい酒も飲んだし踊らないか？」

「一緒にな

「私はいいわ」

マジエンカは暗い顔のままそれを断つた。

「今は気持ちが晴れないから」

「そうなの」

「そんなの踊ればすぐにさっぱりするのに」

「まあいいじゃないか。俺達だけでも踊るう」

「そうだな」

人々は教会の前の広場で輪になつて踊りはじめた。二人はテーブ

ルに向かい合つて座つたまま踊りを見ながら話を再開した。

「それでね」

「うん」

イエニークはマジエンカの言葉に頷いた。

「私本当に困つてゐるのよ。一体どうなるか

「本当に心配なんだね」

「当然よ」

その何気ない言葉にさえ頬を膨らませた。

「相手は噂によるミー・ハさんとの息子さんらしいけれど」

「ミー・ハさんの」

イエニーエクはそれを聞いてその縁の田に奇妙な光を発らせた。ミー・ハはこの村で一番の長者である。

「まだよくわからぬけれどそう聞いたわ」

「そりなんだ」

イエニーエクはそれを聞きあらためて頷いた。

「どうしたらいいかしら」

「そうだなあ」

「ねえイエニーエク」

マジエンカはまた彼に問うた。

「これを聞いても何とも思わないの？」

「何を？」

「私がお嫁さんに行く」とよ。何か全然驚いても心配してもいいようだけれど

「それは誤解だよ」

イエニーエクはまずはそれを否定した。

「当然心配しているわ。他ならない君のことだから」

「そりかしら」

だがマジエンカはそれを聞いてもまだ懐疑的であった。

「私にはそろは見えないのだけれど」

「それは気のせいだつて」

彼はまた否定してみせた。

「本当かしら」

「僕を信じれないっていつの？」

「そうじやないけれど」

マジエンカは逆に言葉を纏らせた。

「けれど貴方つてもてるから」

「まさか」

「彼はそれを笑つて否定した。

「それは買い被りだよ。僕はそんなにモテないよ

「嘘よ

「嘘なもんか。それにモテたってね

「ええ

「僕は君にしか興味がないんだから。それは信じて欲しいな

「どうかしら」

「マジエンカはすねてそう言葉を返した。

「今だつて何か他人事だし。信じられないわ

「おやおや

「お手上げといつたジェスチャーをしておどける。

「どうしてもかい？」

「じゃあ誓えるかしら」

「勿論。君だけを見るつてね

「それならいいけれど

「まだ不安は消えなかつた。

「本当に他の女人に興味はないのね」

「だから何度も言う通り

「それでもマジエンカは不安なようであつた。

「けれど一言言いたいの」

「何だい？」

「浮氣したら酷いんだから」

「おいおい

「イエニークはむくれるマジエンカを宥めにかかつた。

「本当に焼餅なんだから

「パンを焼くのは得意よ

「そう返す。

「私は嫉妬深い女ですからね」

「確かに君の焼くパンは美味しい

イエニークは冗談交じりにそう言つ。

「けれど僕はそのパンに惚れたんだ。だからこの村にいる」

「イエニーク」

「僕はね、ある豊かなお百姓さんの家の子だつたんだ」
そして今度は自分の身の上を語りはじめた。

第一幕その一

「けれどお母さんが早く亡くなつてね。それでお父さんは再婚したんだけれど」

「新しいお母さんに何かあつたのね」

「うん。何かとい辛くてね。お母さんが違うと。そういうわけで村を出てそれで今はこの村に置いてもらつているんだ」

彼は地主の一人の使用人をしているのだ。気のいい優しい主であり彼に対してもよくしてくれる。彼はそれを心から感謝していた。

「そうだったの」

「うん。おかげでね、色々あつたさ」

「けれど今はこうして私の前にいる」

「有り難いことだ。これでわかつてくれたかな

「ええ」

マジエンカは頷いた。

「だからこそ僕は君と離れたくはないんだ。やつと巡り合えたからね」

「嬉しいわ。じゃあもうずっと離れたくはない」

「僕も」

「最後の日まで。それまで私達はずっと一緒に

「うん」

そこに誰かがやつて來た。がつしりとした体格の中年の男だ。

「あ、お父さん」

マジエンカはそれを見て声をあげた。太つた恰幅のよい中年の女人と赤い服を着た痩せた男も一緒だ。

「お母さんも。私を探しているのね」

「結婚のことかな。あれが誰かはまだよくわからぬけれど」

イエニークは赤い服の男を指差しながら言つた。顔も瘦せていて

鼻が異様に高い。何処か木の人形に似ていた。

「どうやら僕は今は身を隠した方がいいみたいだね」「そう言って席を立つた。

「それじゃあまた」

「行っちゃうの？」

「うん、またね」

「それじゃ」

一人は別れを告げた。イヒーークは三人に見つかならないようになりその場を後にすることになった。

三人は広場の方へやって来た。何やら色々と話をしている。

「それではクルシナさん、ルドミラさん」

「はい」

がつしりとした男と恰幅のいい女が赤い服の男の言葉に頷いた。

「先程お話した通りで宜しいですな」

何やら念を押しているようであった。

「ええ、勿論です」

クルシナと呼ばれた男の人がそれに応えた。

「母さんもそれでいいね」

「ええ」

ルドミラもそれに頷いた。この一人がマジエンカのようであった。見ればクルシナの髪の色、ルドミラの顔立ちはマジエンカのものであつた。特にルドミラは歩き方もマジエンカによく似ていた。いや、娘が母親に似たと言つた方が早いであろうか。娘が母親に似たと言つた方が早いであろうか。

非常によく似ていた。

「そういうことです。私共に異存はありません」

「わかりました」

男はそれを聞き満足そうに頷いた。

「それは何よりです。このケツアル」

名乗りはじめた。

「」の頭には知恵が詰まっています。これをふんだんに使わせて頂きましょう」

手に持つて いる傘で自分の頭を突付いてみせる。何か木を叩く音に似た音が聞こえてきた。その外見と妙に合つていていさか滑稽な音であった。

「お任せ下さい」

「はい」

二人は頷いた。そして広場にやつて來た。

「今日娘はこの教会へ行つておりました」

「はい」

「まずはどんな娘か御覧頂きたいのですが」

「いや、それには及びません」

だがケツアルは胸を張つて笑つてそう答えた。

「娘さんは十八でしたな、今年で」

「はい」

「それならば問題はなしです。女の子はその年頃が一番可愛い」
どうやら色々と見てきたようである。少なくともそつは見える。
「ですから容姿は問題なし。性格は御聞きますのところによると非常に素晴らしい」

「有り難うございます」

「それだけ揃えば良縁は自分の方からやつて來ます。さて、花婿ですか」

「はい」

実はそれが最大の心配事である。二人はゴクリ、と息を飲んだ。
「ミー・ハさんを御存知ですね」

「はい」

村で一番の長者である。

「その方のご子息がそのお相手です」

「何と」

二人はそれを聞いて同時に驚きの声をあげた。

「それは本当ですか！？」

「はい」

やはり胸を張つてそう答える。

「どうですか、いいお話でしょう」

「ええ」

「それをまとめるのが私です」
そしてあらためてこう語つた。

「確かあの人には息子さんが一人いましたね」
クルシナがここで言つた。

「前の奥さんと今の奥さんの間にそれぞれ」

「あれつ、そうですか！？」

ケツァルはそれを聞いて少し驚いたようであつた。

「それは初耳ですが」

「そうなのですか」

「ええ」

素つ頓狂な顔にも見える。丸い目をさらに丸くさせたからだ。

「一人だけだと思っておりましたが」

「あれつ、そうだつたかな」

今度はクルシナが首を傾げた。

「二人いた筈ですが」

「私が知つているのは一人です」

ケツァルはそう述べた。

「もう一人いたのですか。しかし今は一人

「それでどんな若者ですか」

「名前は」

「ヴァシエクといいます」

「ヴァシエク」

「はい。気のいい若者ですよ。純朴で」

それは本当のことであった。だが全てを言つたわけではなかつた。

「それについてもご安心下さい」

「わかりました」

二人はそれを聞いてとりあえずはホッとした。

「お金持ちで性格もよくなんてやつがつまらせると

「そうですね」

「あなた、中々いいお話を

「ルドミラが夫にそう囁く。

「やつぱりこれでいいんじゃないかしら」

「そうだな」

クルシナもそれに頷く。

「じゃあ後はお約束通りケツァルをここに任せますよ」

「は」

満足そうに頷いた。そして酒屋の扉の前に座るマジエンカに気付いた。

「あ、マジエンカ」

クルシナとルドミラがまず気付いた。そしてケツァルに紹介する。

「あそこに座っているのが娘です」

「ほう」

ケツァルは彼女を見て声をあげた。

「可愛らしい娘さんですな」

「有り難うございます」

「これはいい。ヴァショク君とお似合いですよ」

「そうなのですか」

「ええ。では行きましょう」

三人はマジエンカの座っているテーブルに向かった。そして彼女に声をかけた。

「マジエンカ」

「あつ、お父さんお母さん」

マジエンカはここではじめて気付いたふりをした。

「どうしたの、こんなところまで」

「実はね、御前の結婚のことだ」

クルシナがそう答える。

「是非お話をしたいという方がおられて」

「はじめまして」

クルシナの横にいたケツァルが帽子を取り恭しく挨拶をする。頭は綺麗に禿げ上がっていた。

「結婚仲介人のケツァルと申します」

「ケツアルさん」

「はい。今回のお嬢様の「結婚のこと」でお話したいことがありますて参上しました」

「話すことなんてありませんよ」

マジコンカは口を尖らせてそう答えた。

第一幕その三

「今は」

「おやおや」

ケツァルはそれを聞いておどけた仕草をした。

「それはいけない。人の話はよく聞いた方がいい」

「聞きたくない時もあります」

「そんなこと言わずに」

「いえ」

ケツァルの言葉に耳を貸そうとしない。

「今はいいですから、本当に」

「あの」

そんな彼女を見てクルシナは心配そうな顔でケツァルに囁いた。

「大丈夫なんですか。今のマジョンカはちょっと」

「ああなたつたら誰の言葉にも耳を貸さないんですよ」

ルドミラもそう囁いてきた。

「御心配なく」

だがケツァルはそれでも余裕であった。

「こうしたことはいつもですから」

「そうなのですか」

「はい。ですからお任せ下さい」

「わかりました」

ケツァルは一人を納得させてから再びマジョンカに話し掛けた。

「まだ何があるんですか?」

「ええ」

むくられたままのマジョンカに優しく声をかける。

「私の仕事は知っていますね」

「はい」

彼女は答えた。

「結婚相手との仲を仲介して貰うのですよね」

「その通り」

「それは有り難いですけど私は今は」

「もうお年頃なのに?」

「ええ」

「むくられたまま言つ。

「今は。いいですか?」

「まあまあ」

ケツアルはまた彼女を宥めた。

「そんなことを言わずに」

「けど」

「貴女の一言で皆が幸せになれるのですよ」

「そうでしょ?」

「貴女(?)自身も。悪い話ではありますよ」

「私はそうは思こませんけれど」

「そんなことを言わずに」

「はつきり言いますけどね」

マジーンカはいい加減痺れを切らしたのか苛立つた声を出した。

「私はもう好きな人がいるんです」

「えつ!?」

それを聞いて驚いたのはクルシナヒルダニアであった。

「そうだったのか?」

「お父さんとお母さんには内緒にしてたけど。もう決めてるんです

「そうだったのか」

雷に打たれたような感じであった。一人はそれを聞いて呆然としていた。

「何時の間に」

「ですがそれは一時のことではないですか?」

だがケツアルはそんなことには慣れているのか驚いた気配はない。

平凡とマジックに対して話を続けた。

「恋人と生涯の伴侶は違うものなのです」

「恋人が生涯の伴侶となるんじゃないんですか？」

「それはまだ浅い」

ケツァルは勿体ぶつてそう述べた。

「人の心なんて秋の空、風の中の羽根みたいなものです。その恋人とやらもどうせすぐに別の幸せを見つけるでしょう」

「何でそんなことが言えるんですか？」

「知っているからですよ」

ケツァルは答えた。

「こうした仕事をしているとね。よくわかります」

「私はそうは思いません」

「今はね」

「これからもずっと。私は誓ったんです」

「誰ですか？」

「彼に。結婚しましようって」

「それは神にこそ誓うものですよ」

「婚約したのよ」

「初耳だぞ」

クルシナはそれを聞いてまた驚いた。

「一体何時の間に」

「どういうことなの！？」

ルドミラもあつた。そしてまたケツァルに囁く。

「無理なんぢやないですか？」

「婚約してるというじやありませんか」

「大丈夫です」

それでもケツァルは動じてはいない。禿た頭がキラリと光った。

そしてその禿頭を指差した。

「何故私の頭がこうなのか御存知ですか」

「いえ」

「これはね、今までの仕事の勲章なのです」

「勲章」

「はい。」うしたことは何度でもありました

「はあ」

「けれどそれを全て解決してきた。知恵を絞つてね。考へていろいろこうして髪の毛がなくなつたのです」

「ではその頭は貴方にとつて勲章」

「その通り」

大袈裟に、得意そうに頷く。

「普通の人にとって禿は不名誉、ですが私にとっては勲章です」

「何と」

「ですからお任せ下さい。この縁談必ずや成功させてみましょう」

そしてまたもやマジエンカに声をかけてきた。

「花婿さんはね、素晴らしい人ですよ」

「けれど私にとって素晴らしいとは限りません」

これは事実であった。人それぞれであり相性というものもある。また立場も。ある人にとって素晴らしい人が他の人にとつてそつだとは限らないのである。

「ですからいいです」

「しかし私は誓つたのです」

「誰ですか？」

「貴方のご両親と向うのご両親に」

「そんなこと知らないわ」

「ご両親でも」

「ええ。お父さん、お母さん」

マジエンカは席を立つて両親に対して言つた。

「私はこの縁談絶対に受けないからね」

そして頬を膨らませたままその場を後にした。後には三人だけが残つた。

「ふむ、気の強い娘さんだ」

「感心してゐる場合じやありませんよ」

「クルシナがケツアルに対してそつまつて。

「実際に困つてゐるんですから」

「私は困つてはおりませんよ」

ケツアルは涼しい顔でそう答えた。

「私はね」

「何か御考えが」

「無論。問題は簡単です」

「はあ」

「要は貴方達の娘さんと私の推薦する若者を結婚せねばよいので

すから。ほら」

「こゝで一枚の紙を取り出した。

「これを御覧下さい」

それは契約書であつた。既にサインまでしてある。

「これがあるのでからね」

「見せて頂けますか」

「どうぞ」

見ればそこに書いてあつた。ルドミラは字を読めないがクルシナは何とか読める。それでたゞたゞしく読みはじめた。

そこにはミーハという名でサインがしてあつた。クルシナのサインも。クルシナの娘とミーハの家の息子を結婚させるとその契約書には書いてあつた。

第一幕その四

「神に誓つて、とそこにはありますね」

「はい」

「我々には神がついておられます。御安心下さい」

「そうですか。しかし一つ疑問があるのでが」

「何でしょうか」

「何故そのミーハさんとの息子さんをミック案内して下さらなかつたのですか?」

「むつ」

クルシナにそう言われてケツァルは一瞬だが嫌そうな顔をした。

「彼と娘を直接会わせればもうちょっと簡単に進むと思うのですが

「実はね」

ケツァルは表情を元に戻して一人に対して説明した。

「彼は内気な若者でして。女の子と話をするのに慣れていないのです」

「そうなのですか」

「はい。純朴な若者でして。私はそうした若者の代理もやつているのですよ。ですから彼には少し待つていてもらつたのです」

「そうだつたのですか」

「ええ。ですが私も他に動く必要がありますね」

「といいますと」

「娘さんの恋人ですよ。彼を探さなければ」「探し出されてどうされるのですか?」

「説得します」

「やりと笑つてそう答えた。

「それでね。充分ですよ」

「充分でしようか」

「説得にも充分ありましてね」

彼はクルシナとルドミラに対して説明をはじめた。

「言葉だけではないのです」

「といいますと」

「おわかりになりませんか。袖の下ですよ」

実際に袖の下に手を入れる仕草をしながら説明をする。

「それで大抵はどうにかなるのです。まあここは任せて下さい」

「それでしたら」

「お願いしますね」

「はい。ではこれで」

こうしてケツァルは一人に一礼してその場を去った。後には一人と周りにいる村人達だけが残つた。だが村人達は三人の話なぞ知るよしもなく上機嫌で酒と食べ物を楽しんでいた。

さらに場が盛り上がつた。ここで誰かが言つた。

「いつちょ踊るか」

「よし」

それを受けた皆一斉に立ち上がつた。老いも若きも前に出る。誰かが楽器を奏ではじめた。

踊りがはじまつた。皆赤い顔で笑顔に包まれて踊つていて。

その教会から離れた別の居酒屋であった。イエニークはそこで仲間達と一緒に飲んでいた。

木造の質素な酒場であった。木は頑丈であり風が吹いてもびくともしそうはない。椅子もテーブルもである。黒っぽいその椅子とテーブルにイエニーク達は座っていた。そして酒を楽しんでいた。

「乾杯！」

彼等は木の杯を打ち合わせてそう叫んだ。まずは杯の中にある黄色く、白い泡が立っているビールを一気に飲み干した。そして機嫌のいい顔でこう言い合つ。

「美味しいな」

「ああ」

「やっぱり酒はいい」

「百葉の娘とはよく会つたものだ

「全くだ」

「けれどもつといいものがあるよ」

「ここでイエニークが仲間達に対してそつ語り掛けってきた。

「それは何だい？」

「恋さ」

仲間達の問い合わせにそつ答える。

「このビールにじろワインにじろ恋人と一緒に飲むのが一番美味しいだろ」

「まあな」

仲間達はそれに頷いた。

「男同士で飲むよりはな。女の子と一緒に飲んだ方がいい」

「前に座っているのが恋人ならな。それはあんたに同意するよ」

「有り難う」

イエニークはそれを聞き満足そうに頷いた。

「有り難いね、わかつてくれるとは」

「そういうえばあんたあの娘とはどうなつてているんだい？」

「?ああ、マジンカのことか」

「マジンカ!？」

それを店の側を通り掛つたケツアルが聞いた。

「今マジンカと言つたかな」

そして耳をそばだてる。聽けば確かにマジンカの話をしていた。

「うまくいってるよ」

イエニークは上機嫌で語っていた。

「婚約もしたし。もうすぐ僕は彼女と一緒になるよ

「それは何より

「何よりではないわ

ケツアルはイエニークの仲間達の言葉にそつ突つ込みを入れた。

「そんなことされたらたまつたものではない」

「けれど氣をつけなよ

店の中で仲間の一人がイエニークにそう言った。

「どうしてだい？」

「何でもあの娘最近親が縁談を進めてるっていうじゃないか」「うかうかしてると御前さんも危ないんじゃないじゃないか？」

「ああ、あれね」

イエニークはその話を聞き少し考える目をした。

「それなら心配ないよ

「何があるのかい？」

「どういうことだ」

仲間達はそれを聞き彼に問い合わせツアルは不安な顔になった。

「それはこれからのお楽しみ」

「おお、何か面白そうだな」

「面白い！？馬鹿を言え」

だがケツアルはそれを聞いて不機嫌な顔になつた。

「商売の邪魔をされてたまるか。さて」

彼は店の入口の方に回つた。

「情報収集じや。一体どんな奴か見ておかなくてはな
そして店に入った。

「おかみ、席は何処だい」

「あそこはどうですか」

店のおかみは若者達がいる席のすぐ側を指差した。

「いいな。そこにしよう」

「はい。」注文は

「ビールとソーセージ」

彼はまずはそれを注文した。

「あとはジャガイモをふかしたもの。それでいい
「わかりました。ではそれで」

「うむ」

彼はテーブルに着いた。そして飲みながらイエニーク達をチラリと見た。

（「」の中の誰だ、そのイエニークというのは）
まずはイエニークを探しはじめた。それはすぐに見つかった。

「ところでイエニーク」

「何だい」

黒いチョッキの小粋な若者がそれに応えたのだ。

（あいつか）

ケツァルはすぐに彼に目星をつけた。

（あいつのせいでいらん苦労をすることになるな）

舌打ちしたかつたがイエニークに聞かれるのを警戒してそれは止めた。そして言った。

「恋は確かに大切なもの」

「ええ、勿論」

イエニークはそれに乗つてきた。

「わかつて頂けますか」

「しかしもつと大切なものがありますな」

「それは？」

「お金です」

ケツァルは笑つてそう答えた。

「お金は恋よりも大事だと思いますが」

「いやいや」

だがイエニークはそれを笑つて否定した。

「お金は作ろうと思えば作れるものです」

「はい」

「ですが恋はそっぽいかない。恋は作ろうと思つても作れませんからね」

「ほつ」

ケツァルはそれを挑戦状と受け取つた。だがそれを顔に出すわけにはいかなかつた。

「それを証明して頂きたいですな、いざれ」

「喜んで」

「おいやーーク

ここで仲間の一人が声をかけてきた。彼はその手にギターを持っている。

「踊らないか？俺が演奏するからわ」

「お、いいね」

応えながらケツァルに顔を向けてきた。

「どうですか、貴方も」

「いや、私はいいです」

ケツァルは愛想笑いをしてそれを断つた。

「今はビールを楽しみたいので。宜しいでしょうか」

「それなら

無理強いはしなかつた。彼はケツァルから顔を離し席を立つた。

そして他の仲間達に対して言った。

「踊るか。僕の幸せの前祝いに

「よし！」

ギターの演奏がはじまつた。そして皆踊りはじめた。この辺りの民族舞踊であった。

ケツァルはその踊りと音楽を拝見しながらビールを飲んでいた。一人これからのことについて思いを巡らすのであった。

第一幕その一

第一幕 一人の若者

村の外れの森の側。そこに一人の若者が座り込んでいた。

茶色の髪に赤っぽい顔をしている。童顔でそれ程男前とは言えない。顔立ちは悪くはないが何処かぼんやりとした感じを「」える。大人しそうな顔だ。

青い服に白いズボンを身に着けている。服から見るにわりかし裕福な生まれのようである。それ故か本当にぼんやりとした若者であった。

「お、そこにいたか」

切り株の上に座り込んでいる彼に樵が話し掛けってきた。

「ヴァシェク、またどうしてこんなところにいるんだい？」

「あ、おじさん」

ヴァシェクは名前を呼ばれて顔を上げた。

「ちょっとね、考え方をしてたんだ」

「一体何についてだい？」

「うん、ちょっとね」

ヴァシェクは樵に困ったような顔をして応えた。

「今僕のお父さんとお母さんが僕の結婚のことで話を進めてるよね」

「ああ」

「それがね、心配なんだ」

「どうしてだい？」

「僕の好きな人が相手じゃないんじゃないかなあ、って。もしそう

なつたらどうしよう」

「何だ、相手のことを知らされていないのかい」

「うん」

ヴァシェクは力なくそう答えた。

「一体どんな人なのかなあ。エスマラダ先生だつたらいいけれど」

村の学校の先生である。ヴァシェクより少し年上だ。気が強いが頭の回転が早い美人だ。ヴァシェクは彼女に密かに憧れているのである。

「できたら先生と一緒になれたら
「それは御前さんの親父さんとお母さんに話すべきじゃないのかい？」

「うん」

ヴァシェクはまた頷いた。

「僕だつて言いたいけれど。何か怖いんだ」

「どうしてだい？」

「反対されるから。そしたら何もかもお終いだし」

「おいおい」

樵はそれを聞いて呆れたような声を出した。

「そんなんじやあ何をやつても駄目だぞ。いいかヴァシェク見るに見かねた樵が彼に対して語りはじめた。

「男つてのはなあ、度胸だ」

「そりなの？」

「御前さんにはまだないがな。度胸が全てなんだ」

樵は胸をドン、と叩いてヴァシェクに対してそう言った。

「度胸なんだ、いいな」

「そりなんだ」

「それで女なんてのはな、押し通せばいいんだよ。一に押す、二に

押す

「押してばかりなんだね」

「そうや。三も四も押す、そして最後まで押し通すんだ。俺はそれで今のかみさんを手に入れたんだ」

「ヒヒヒで自慢気に笑つた。

「どうだ、わかつたか」

「ううん」

しかしどよくはわかつていないうつであつた。首を傾げる。

「そうなのかなあ。僕にはよくわからないいや

「わからないでは樵どころかかみさんの貰い手もねえぞ」

「わかつてゐけど」

「じゃあ話を変えよう。心だ」

「心」

ヴァシェクはそれを聞いて顔を上げた。

「そう、心だ。御前さんは少なくとも心はいい」

「うん」

「それを使え。そうしたら幸せになれるぞ」

「そううまくいくかなあ」

それでも不安であった。

「御前さんは鈍臭いからなあ。けれどまあ神様は見ていてくれているからな」

「神様が」

「ああ。少なくとも神様は見捨てやしないさ。御前さんみたいなのは」

「だといいけれど」

「はつきり言つちまうとな、度胸や頭がなくても心さえよければ生きていけるのや。だから御前さんだつて大丈夫だ」

「うん」

「だから安心しな。今回のことだつて大丈夫だからな」

「だといいけれど」

「そんなんにエスマラダ先生がいいのなら神様がそうしてくれるや。それを待つてな」

「わかつた」

ヴァシェクは頷いた。

「じゃあ神様にお願いしてみるよ。有り難う」

「ははは、神様にそれは言いな」

樵は笑つて手を振りながら森の中に入つて行つた。ヴァシェクはそれを見送るとまた座つて考えだした。

「神様かあ」

樵に言われたことをぼんやりと思い出しながら考えていた。

「お願いすると先生と一緒になれるのなら」

空を見上げながら言つ。

「お願いしよう。先生と一緒になれますように」

空に向かつて祈つた。純真な祈りであつた。

そんな彼の側に一人の少女がやつて來た。彼とは違つて利発そうな可愛らしい少女であつた。

「あれがヴァシェクね」

それはマジエンカであつた。彼女は物陰からヴァシェクを覗いていた。

「何かあんまり賢そうじやないわね。悪い人じやないみたいだけれど」

一目でヴァシェクを見抜いていた。そして彼の様子を見る。祈りを終えたヴァシェクは側に置いてあつた弁当の蓋を開けた。そしてパンや果物を食べはじめた。丁度おやつの時間であつた。

「うつ」

マジエンカはそれを見て空腹を覚えた。彼女も育ち盛りなので

ぐにお腹が減るのだ。

だがここは我慢が必要であつた。ぐつといじりえてヴァシェクの方へ歩み寄つた。

「ねえ

「何?」

ヴァシェクに声をかける。すると彼は顔を上げてきた。

「貴方がヴァシェクね」

「うん

彼は答えた。

「そういう君は?」

「私のことはいいわ。それよりね」

「うん」

ここで突つ込むべきだったのであろうがぼんやりとしているヴァシェクはそれをしなかつた。それが迂闊だった。

「貴方確かにクルシナさんとの娘さんと結婚するのよね」

「そういうことになつてるね」

ヴァシェクは浮かない顔でそう答えた。

「あまり気が乗らないけれど」

「あら、どうして?」

マジエンカはそれを聞いてしめた、と思つた。

「僕はね、実は好きな人がいるんだ」

「誰かしら」

「それはちょっと」

「誰にも言わないうから教えてくれないかしら」

「誰にも言わない?」

「ええ」

マジエンカは頷いた。

「約束するわ。誰にも言わないわ」

「それなら」

それを聞いて納得した。そして言つた。

「エスマラダ先生だよ」

「エスマラダ先生? ああ、あの人ね」

マジエンカにもそれが誰なのかわかつた。この村の学校の先生であつた。気が強くて頭もいいしっかりした女人であつた。

第一幕その一

(成程ね)

それを聞いて頷くものがあつた。

(彼には確かに似合つているかもね)

「ねえ」

ヴァシエクはあらためて尋ねてきた。

「どう思うかな、君は」

「貴方と先生のこと?」

「そうだよ。先生と一緒にになりたいのだけれど」

「いいと思つわ」

心中で私じゃないから、と呟きながら囁く。

「そう思つ?」

「ええ。少なくともクルシナさんとこの娘さんよつはずいとね。い

いと思つわよ」

「ところども」

「何?」

「そのクルシナさんとこの娘さんだけどんな人?君は何か知つて
るみたいだけれど」

「聞きたい?」

「うん。どんな人なのかなあ」

「ここだけの話だけれどね」

あえて声を顰めさせた。

「うん」

「最悪よ

「最悪!?」

ヴァシエクはそれを聞いて思わず声をあげた。

「ええ。あれはとんでもない女よ。絶対にやめた方がいいわ

「そ、そうなの」

マジエンカのことを知らないヴァシクはそれを聞いて大いに驚いた。

「あり、知らなかつたの? 村では有名だつたけれど」

「し、知らないよ」

ヴァシクはブルブルと首を振つてそれに答えた。

「そんなに酷いの」

「底意地が悪くて怠け者でお金に汚くて。しかも浮氣者よ」
よくもまあ自分のことをそれだけ悪く言えるものだとひそかに感心していた。

「どう、先生とマジエンカ、どっちがいいかしら」

「そんなんの答えるまでもないじゃないか」

ヴァシクは少し興奮しながらそつ言葉を返した。

「先生だよ、絶対に先生がいい」

「嘘じやないわね」

「僕は神様に誓つてているんだ」

「彼は強い声でそう返した。

「絶対に嘘はつかない、悪いことはしないって。神様だけじゃなくて誰にでもそう約束できるよ」

「じゃあわかつたわ」

マジエンカはそれを聞いて満足そうに頷いた。

「貴方は先生と結婚しなさい。いいわね」

「うん。けれど一つ問題があるんだ」

「何かしら」

「母さんのことなんだ」

ヴァシクは弱々しい声でそつ漏らした。

「お母さんの?」

「うん。それをどうするか

「ねえヴァシク」

マジエンカはヴァシクに問つてきた。

「何?」

「貴方このままそのとんでもない女と一緒にになりたいのかしい」

「そ、それだけは嫌だよ、絶対に」

またブルブルと首を横に振る。

「絶対に。何とかならない?」

「じゃあお母さんは関係ないわね」

「うん」

ヴァシュクは頷いた。

「そういうことよ。貴方がやるいとは一つよ

「一つ?」

「ええ。お母さんには、言つゝよ」

「何て言えばいいの?」

マジエンカに顔を向けて問う。

「この結婚は嫌だつて言つた。マジエンカとなんか結婚したくはないってね

「それだけでいいんだね」

「それだけよ。それで貴方は幸せになれるわ」

そして私もね、とまた心の中で呟く。

「いいかしら、それで」

「うん、うん」

彼は何度も強い調子で頷いた。

「じゃあ決まりね。先生には貴方から言えればいいわ

「僕から?」

そういうわれて急に弱い顔になつた。

「何があるの?」

「そんなこと言えたら最初からこんな気持ちにはならないよ」

彼は沈んだ顔と声でマジエンカに対してそう言つた。

「僕はね、言えないんだ」

「あら」

「先生にも誰にも。これも凄く困つててるんだ」

「そうね。じゃあ先生には私から言つておくわ

「頼めるかな」

「任せて。私しつしたことは得意なんだから」
自分の為にも絶対に何とかしなければならないと固く思つた。本音ではエゴだが今はそれは隠した。ヴァシェクを助けることが結果として自分自身を助けることになるとは皮肉なものだと思つてはいるが。

「それでいいわね」

「うん。お願ひできるかな」

「任せて。それじゃあね」

「さよなら、親切な娘さん。君のことは忘れないよ」

「ありがと。それじゃあね」

別れながら悪い印象は受けなかつた。あまり頭の回転は早くはないようだがどうにも悪い人物ではない。むしろ素朴で善良な人物だ。そんな若者を騙すのは気が引けるがここは自分の為であつた。

（それが同時に彼の為でもあるなんて）

それが今一つわからなかつたがここは動くことにした。何はともあれ自分自身の幸せの為であつた。マジエンカは果敢に動くことにした。

第一幕その三

その頃イエニークは先程の酒場でケツァルと一人で話していた。仲間達とは別れ彼等は今はもう別の場所に楽しくやっている。

「ケツァルさんと仰いましたね」

「はい」

「人はテーブルに向かい合つて座つてゐる。酒も食べ物もなく話に専念していた。

「僕に用件とは」

「他でもありません。貴方の恋人のことですが」

イエニークはそれを聞いておおよそのことは見当がついた。だがそれは顔には出さなかつた。

「それが何か」

「いえね、お願ひがありまして」

「はい」

「別れて頂けないでしょうか」

「面白いことを仰りますね」

イエニークはそれを聞いて不機嫌な顔を作つた。

「一体何の権限があつて僕にそう言われるのか」

「権限ですか」

「ええ。大体貴方は何者ですか？」

「私? 結婚仲介人ですよ」

「ああ、礼金を謝礼としておられるのですね」

「左様。以後お見知りおきを」

そう言つて頭を垂れる。

「宜しくお願ひします」

「残念ですが僕は貴方のお世話にはならないでしよう」

「何故ですか?」

「僕はもう決めた人がいるからです。それがマジエンカです」

「つまり断る気はないと

「ええ」

「どうしても」

「どうしても、です」

「彼は強い声でそう答えた。

「左様ですか。ふむ」

ケツァルはここでビールを注文した。

「喉が渴きましたな。」一緒にどうですか

「貴方のおごりですか」

「勿論です。私がお話している立場なのですから

商売人としてのツボは押さえている。ここは彼をおいむことにした。

「さあ、どうぞどうぞ」

黒ビールが運ばれてきた。一人は杯を打ち合つてからそれを飲んだ。濃厚なビールの味と香りが一人の口の中を支配した。

「美味しいですな」

「ええ。こここの店のビールは評判なんですよ」

イエニークはそれに答えた。

「美味しいとね。それでは話を続けましょうか」

「ええ。彼女は約束したのですよ」

「彼女が約束したのではないでしょう?」

「ま、まあそれはね」

ケツァルはイエニークのその言葉に戸惑いながらも答える。

「彼女の両親がですよ。あと花婿の両親が」

「花婿の両親は誰ですか?」

「ミー・ハさんです」

「ミー・ハ? ああ、あの二人ですね」

イエニークはそれを聞いて表面上は何もなかつたように頷いた。だが心の中では笑っていた。

ケツァルは非常に用心深く見ていれば彼の顔が僅かに変化したこ

とに気が付いたであろう。だが残念なことに彼は別のことを考えていたそれには気が付かなかつた。

「御存知ですか？」

「名前だけはね。確かにこの村で一番の長者さんです」

「はい、その通りです。そのミーハさんと約束したのですよ」

「何と？」

「彼女とミーハさんの息子を結婚せるとね。ほら」

そう言いながら懐から契約書を出してきた。

「あ、貴方字は読みますか？」

「ええ」

イエークはそれに頷いた。

「ふむ」

そしてその契約書を読みはじめた。確かにそこにはクルシナの娘とミーハの息子を結婚させるとある。確かにそう書かれていた。

「確かに書いてありますね」

「はい。クルシナさんの娘さんはミーハさんの息子さんですね。確かに」

「クルシナさんの娘さんはマジソンカさんお一人ですね」

「ええ」

「そしてミーハさんの息子さんはあのヴァシコク君だけ」

「あれ」

「だが」「」でイエークは思わずふりに笑いながら首を傾げてみせた。

「何か不都合でも？」

「いえいえ」

だがイエークは左手を横に振つてそれを否定した。

「何もありません。お気になさらずに」

「そうですか。それで宜しいですね」

「まあそうでしょうね。それでですね」

「はい」

「そのヴァシエク君は一体どのよつたな若者ですか？」

「気のいい若者ですよ」

ケツァルはそう答えた。

「性格はね。かなりいいです」

嘘は言つてはいなかつた。だが肝心な部分は何一つ言つていないのである。こうした話の常ではある。そうしたところでも彼は商売人であつた。

「そうですか」

「ええ。彼のこととは御存知ない」

「そうですね」

イエニークは答えた。

「名前だけは聞いたことがありますけれど」

彼もまた肝心なことは言わなかつた。イエニークはケツァルのそれには気付いていたがケツァルはイエニークのそれには気付いてはいなかつた。これが大きな差であつた。

「左様ですか。では本題に入りましょう」

「はい」

二人はビールをまた飲んだ後で話を再開した。

「それでですね」

「はい」

「彼女と別れではくれませんか」

「ミーハさんとこの息子さんと結婚させる為ですね」

「そうです。おわかりになられましたか」

「一応は。ですが」

「貴方はまだお若い。相手なぞ幾らでもありますよ」

「彼はそう言つてイエニークを宥めにかかつた。

「それにそれだけ男前なのですか？」

「男は顔じゃありませんよ」

イエニークは笑つてそのお世辞に返した。

「男は心ですよ。真心です」

「いや、お金ですよ」

「お金なんてものはね」

「彼は言った。」

「ちょっと頭を使えば幾らでも手に入りますから」

「強気ですね」

「それが世の中といつものです。さて」

「はい」

ケツァルは彼に顔を向けた。

第一幕の四

「どうやって僕に引いてもらひつもりなのですか？仰つて下せ」
「何だと思いますか？」

「さて」

彼はとぼけてみせた。

「暴力ではないのは確かですね」

見たところケツァルにそんな力はない。ひょろ長い身体をしており見るからに力はない。武器といえば傘だけだ。だがこれが何の役に立つだろ？ 精々雨をよけるだけしか役に立たない。

「私は暴力は嫌いです」

彼の方でそれはきつぱりと否定した。

「何しろうちのやつに毎日ひつぱたかれてありますか？」

「そうだったのですか」

「ええ。ですからそんなことしません」

意外にも恐妻家であるらしく。そう言われてみればそんな感じもしないわけではない。

「私はあくまで仲介屋です」

「はい」

「私の信念はお金にあります」

「お金に」

「お金ですか」

「そう、そしてそのお金を使ひ」とじょじょに

要するに買収である。これは実によくあることであった。

「幾らなりまじでしょ？」

「ちょっと待つて下さい」

イエニークは不機嫌な顔を作つてみせた。

「何か」

「僕を買収するつもりですか？」

「それは人聞きの悪い」

「では何故」

「私からのほんの気持ちですよ。ほんの気遣いです」

「気遣いですか」

「ですから是非受け取つて下さい。宜しいでしょうか」

「ふむ」

イエニークはそれを聞いて考えるふりをした。あくまでふりである。

「マジエンカの家には何があるか御存知でしょうか」

「勿論」

ケツアルはイエニークの問いに快く答えた。

「かなりの資産家でありますな」

「僕はそれよりも彼女の方が大切ですけれどね」

「またそんな。彼女だけですか?」

「僕はそうですよ」

臆することなくそう返す。

「先程も言いましたがお金とかは頭を使えば出て来るものですから」

「ふむ。強気ですね」

「それは貴方だって同じだと思いますが」

「私も?」

「ええ。貴方は紙と舌で仕事をしておられますね」

「ええ」

「だったら同じですよ。人間といつのはそういうのです

「今一つ意味がわかりませんが」

ケツアルは首を傾げながらそう述べた。

「ですがお話を続けてよいですね」

「ええ、どうぞ」

「一匹の子牛、子豚、家鴨にガチヨウ、それに田畠までありますな

「よく考えればどの家にでもありそうなものですね」

「むつ」

ケツァルは言葉に詰まつたがすぐに返した。

「それに食器も。それはどれだけの価値があると思われますか」

「そうですね」

イエニーグはまた考えるふりをした。そしてケツァルに問つてき
た。

「貴方はどう思われますか?」

「私ですか?」

「ええ。彼らの価値があると思われますか」

「そうですな」

ケツァルは真剣に考へながら自分の意見を述べた。その顔は本当に真剣なものであった。

「一〇〇グルデン程でしょうか」

「何だ」

イエニーグはそれを聞いて呆れた声を出した。

「それだけの財産がそれだけか。いや、マジエンカを忘れるのこそ程度で」

「不ですかな」

「不服ではありませんよ」

ムツとしたケツァルにそう言葉を返す。

「ただその程度か、と思つただけです。マジエンカを忘れるのにたつた一〇〇グルデンとは。いやはや」

「では一〇〇ではどうですかな」

ケツァルはお金を倍にしてきた。そしてイエニーグを見据えた。

「それなら文句はないでしよう」

「単に倍にしただけではありますか?」

しかしそれに対する彼の声は冷ややかなものであった。

「それで誰かを納得させられるとしても、僕も含めて」

「うぬぬ」

ケツァルの顔が怒りで赤くなつた。

「ではどれだけあればよいのですか?」

「それだけあればよいのですか?」

「お金の多さではないのですよ」

イエニークはそう述べた。

「誠意です」

「誠意！？」

「そう、貴方のね。誠意を見せて頂きたいのです。宜しいでしちょうか」

「・・・・・・・・・・」

ケツァルはそれを聞いて沈黙してしまった。今まで赤くなつていた顔が急に白くなつてしまつた。どうやら落ち着きを取り戻したようである。

「わかりました」

そしてそう答えた。

「私も結婚仲介人です。では誠意を見せましょ、う」

「その誠意とは」

「三〇〇グルーテンです」

それが誠意であった。

「これではどうでしようが。貴方にとっても充分な誠意の筈ですが」「ふむ」

イエニークはまたしても考えるふりをしてみせた。だがやはりケツアルはそれに気付かない。

「誠意ですね、確かに」

「はい」

ケツアルはそれを聞いてニヤリと笑つた。勝つたと思つたからだ。

「私の誠意、理解して頂けたようですね」

「はい。ですが誓約書に書かれている言葉ですが」

「はい、これですね」

ケツアルはまたイエニークにその誓約書を見せた。イエニークは

そこのある部分を指し示した。

「ここですね」「

「ここ」

「そりゃ。」にクリルシナの娘はミーハの息子と結婚するとあります

ね

「はい」

「ミーハの息子と。これに間違いはありませんね」

「勿論です」

ケツアルは胸を張つてそう答えた。張りすぎて帽子がずれ頭の一部分が見えてまぶしい程であった。

第一幕その五

「私は嘘は申しません」

「わかりました」

「今度はイエニークがニヤリと笑つた。

「それではそこをとりわけ覚えておいて下さる」

「はい」

ケツァルは得意満面でそれに頷く。

「喜んで」

「わかりました。 それでは僕もそれに誓いましょう」「何と誓われるのですか？」

「マジエンカはミーハの息子以外の誰の妻にもならない、とね。これを誓いましょう」

「わかりました」

「二人は互いにニヤリと笑つてそう言い合つた。だがその笑いはよく見るとそれぞれ全く違うものであつた。それに気付いていたのはやはりイエニークだけであつた。

「これで満足でしょうか」

「まだあります」

「何でどうか」

それを聞いたケツァルの顔が急に不機嫌なものになる。だがイエニークは言った。

「ミーハの息子とマジエンカが婚礼をあげそれを神が承認されたならば」

「はい」

「ミーハの父親は棄権しなければならない。宜しいですね」

「何だ、そんなことですか」

彼はそれを聞いて安心して笑顔になった。また金でも取られるのかと内心警戒していたからである。

「それならいいですよ。それでは」

契約書にそう書いた。

「あとの葉権はクルシナからの借金について。それもいいですね」

「ええ」

「それも書いた。ケツァルはそれをイエニーグに見せてまた問うた。

「これで宜しいですね」

「確かに」

イエニーグは遂にそれを認めた。

「僕は二〇〇グルデンを手に入れた。これでいいですね」

「はい。私も。それではイエニーグさん」

「はい」

「ご機嫌よう。新しい恋を見つけられるよう」

「わかりました。ではこれで」

「はい」

ケツアルは帽子をとつて彼に一礼した後で酒場を後にした。後にはイエニーグ一人が残っていた。彼は何食わぬ顔でまずはビールをまた注文した。

「どれにしますか？」

「黒を」

彼はにこりと笑つてそう答えた。

「今は黒がいい。何か腹黒い気持ちになれるから」

「おやおや」

おかみさんはそれを聞いて思わず笑つてしまつた。

「また変なことを言つね。一体どうしたんだい？」

「ははは、洒落さ」

イエニーグは笑つてそう返した。

「けれど黒が飲みたいのは本当だよ。たつぱりとね」

「あいよ」

「あとはソーセージをね。茹でたやつを」

彼の好物である。何かいいことがあつた時はいつもこれを食べる

のである。そう、いいことがあった時には、黒ビールも同じであった。

「さてと」

彼は黒ビールとソーセージを前にして一人意を決した顔になつた。
「あのおじさんはとりあえずはこれでいいな」

木のフォークを手にし、一本のソーセージにブスリと突き刺す。
肉汁がその中から溢れ出てきた。

それを口に入れる。腸を噛み破ると口の中に肉の旨味が広がつていぐ。そしてそこには玉葱のものもあつた。この店のソーセージは中に玉葱も入れていいのだ。

それを食べた後でビールを口にする。ソーセージの旨味とビールの苦味が口の中で混ざり合つた。

「問題は皆をどうやって信じさせるかだな」

「彼はここでひとまずフォークを置いた。

「皆僕をマジエンカを売つたと思つていいな。恋人を売つた卑しい奴だと」

ソーセージから湯気が出ている。それを見るとまた食べたくなつた。

またフォークを手にとりそれを食べる。そしてまたビールを飲む。飲みながら考える。酒が頭の回転を助けてくれていた。急に頭の中が回りはじめる。

「マジエンカを売つたと思われるのはしゃくだけれど」「実はそれは彼にとつても本意ではなかつたのである。

「それをどうするか、だな。さて」

ソーセージとビールを味わいながら考える。

「お金と恋なら恋の方がずっと大事に決まつていい」「その信念は変わらない。

「お金なんて幾らでも手に入る。だけれど恋はそういうかないんだ」「恋は人によつては決して見つけることができないものである。手に入れられない者すらいる。偶然手に入る場合もあればどうやって

も手に入れられない場合もある。恋の神というのは非常に気紛れな存在でありその心は移ろいやすい。イエニークにもそれはわかつていた。

第一幕その六

「恋程価値のあるものはない。お金なんかで買えはしないのはわかっている」

今の自分と矛盾する行為であつてもだ。

「三〇〇グルデンなんかで売れるものか。マジエンカを失う位なら死んだ方がましだ」

だが彼はケツァルからその金を受け取ることになった。それは何故か。

「恋を捨てるのなんて論外だ。恋は手に入れようとすれば逃げてしまう。望んでもこちらにはやつて来ない。そんなものをどうして売れるというんだ」

矛盾していた。そしてその矛盾については彼もよくわかつっていた。「マジエンカの為だ、全ては」

どうやらその三〇〇グルデンもまたマジエンカの為であるらしい。真相はまだ彼にしかわからないが。

それを今わかつているのは彼だけであつた。そう、ケツァルもマジエンカもわかつてはいなかつた。マジエンカに至つては今の時点では売られたことすら知らないのである。

「マジエンカ、見ていてくれ」

彼は最後にまた呟いた。

「君の為に僕は戦っているんだ。それは最後でわかる」

「皆さん」

ここで店の外からケツァルの声がした。

「来たか」

予想通りであつた。彼はケツァルがここに戻つてくることを予想していたのだ。しかも証人達を連れて来て。彼は一人密かに身構えた。

「ここですよ、ここに彼がいます」

「しかし本当ですか」

店の外で男の声がする。

「何ですか?」

「イエニーケのことですよ」

「それですか」

「ええ」

もう声は扉のすぐ前にまで来ていた。

「彼がそんなことを。信じられません」

「信じられるも信じられないもこれは事実です」

ケツアルはそう答ながら扉に手をかけた。

「それを今から皆さんに証人になつて頂くのです。宜しいですね」

「わかりました」

そして扉が開かれた。ケツアルの後ろには大勢の村人達がいた。

(来たな)

イエニーケはそれを見て心中で身構えていた。

「やあイエニーケさん」

ケツアルは勝ち誇った顔で彼に話し掛けってきた。満面に笑みを浮かべている。

「先程のお話のことですが

「はい」

彼は顔を向けてきた。顔はビールのせいでほんのりと赤くなっている。

「さつきのお話ですか」

酔っているふりをしてみせた。ケツアルを油断させる為である。

「はい。それも宜しいですね」

「ええ。三〇〇グルデンに関して

「皆さん、聞きましたか」

彼はそれを聞くと村人達に嬉しそうな顔を向いた。

「彼は今三〇〇グルデンとしましたね」

「ええ」

村人達は何が何かわからないままそれに頷いた。

「それでは話を続けましょう」

そしてまたイエニークに顔を戻した。

「イエニークさん」

「はい」

彼は座つたまま答える。

「そちらの席に戻つて宜しいでしょうか」

「ええ、どうぞ」

彼はそれに応えた。

「構いませんよ、どうぞこちらに」

そして先程まで彼が座つていた目の前の前の席を薦めた。ケツァルはそれに従いそこに着いた。その周りを村人達が取り囲む。イエニークも囲まれる形となつた。

「それでは」

ケツァルは席に着くと懐に手を入れた。

「まずは先程の契約書ですね」

「はい」

イエニークはビールを飲みながらそれに応える。田はケツァルに向いている。

「これですが」

そしてそれをイエニークの前に出してきた。村人達が見やすいようにわざわざ広げる。

「ここに書いてあることに間違いはありませんね」

「ええ」

ビールを飲みながら素っ気なく答える。

「確かに。間違いありません」

「クルシナの娘は」

ケツァルは嬉しそうに言う。字の読めない者に言つて聞かせる為だ。

「マジエンカのことだな」

皆それを聞いてヒソヒソと囁き合つた。

「ミーハの息子以外とは結婚することはできない」

「ヴァシェクのことか」

皆それを聞いてまた囁き合つた。

「これで間違いありませんね」

「はい」

イエニーグは頷いた。

「確かにその通りです」

「何！」

村人の中にはそれを聞いて激昂する者までいた。

第一幕その七

「イエニーク、それは本当か！」

「嘘じやないんだな！」

「まあまあ皆さん」

ケツァルはそんな彼等をここは宥めた。

「怒られないように。これはもう決まったことですから」

「ううむ」

彼等はそれを聞いて何とか感情を抑えた。だがその顔は怒ったままであつた。何とか理性で抑えているといった感じであつた。

「詳しいことはこちらに」

ケツァルは契約書を見せながら村人達に対して言つ。

「読めない方は読める方に聞いて下さい」

読める者がそれを見る。そこには確かにケツァルの言つたことがそのまま書かれていた。間違いはなかつた。

「イエニーク」

村人達はあらためて彼を睨みつけた。

「そんな奴だつたんだな。見損なつたぞ」

だが彼は涼しい顔でソーセージを食べビールを飲んでいる。批判なぞ何処吹く風といった様子であつた。

「自分の恋人を売るとはな」

「しかもはした金で。そんなに金が欲しいのか」

「皆さん」

ケツァルはここで善良そうな顔で一同に対して言つた。

「お金は何よりも大切なものです」

「あなたにとつてはな」

彼等は冷たくそう言い放つた。

「だがこいつは違つていたんだ。少なくとも今まではそう言つていた」

「それが急にマジンカを売ったんだ。どうこうとかわかるな」「よくあることです」

「そうではないですか」
「だがケツアルの声は素つ氣ないものであった。

「あんたにはどうやらわからんみたいだな」「人生を長くやつていればわかりますよ」

それでもケツアルの答えはシニカルなものであった。

「かみさんと長くいるとね」
恐妻家故の言葉であった。

「まあいいでしょ。イエニーグさん」「はい」

「サインがまだでしたね。サインをして頂けますか」「わかりました」

ケツアルからペンを受け取った。鳥の羽根のペンである。

「ここですね」「はい」

指差したところにペンを持つてくる。既にインクはついている。

「イエニーグ」

村人の中にはクルシナもいた。彼はイエニーグを睨みつけながら声をかけてきた。

「クルシナさん」

「確かに俺はマジンカとミーハさんとの結婚を承諾した」

「はい」

「だがあんたのことは認めてきたつもりだ。しかしそれは誤りであつたみたいだな」「そうですか」

イエニーグの返答はやはり素つ氣ないものであった。

「あんたみたいな恥知らずは知らん。一体どうこうつもりなんだ」「そうだそうだ」

他の村人達もそれに続いた。

「イエニーグ、見損なつたぞ」

「御前はそんな奴だつたのか」

「おい答える」

「返事をしろ、どうなんだ」

「ケツアルさん」

だがイエニーグはそれに答えずにケツアルに顔を向けていた。そして彼に問うた。

「それではサインをしますね」

「ええ、どうぞ」

彼はニンマリと笑っていた。そしてイエニーグがサインをするのを見守っていた。

「これでよし」

「はい」

サインをした紙をケツアルに見せる。これで決まりであった。

「本当にしやがつたよ」

「信じられないわね」

「とんでもない奴だ」

村人達は口々に言う。だがイエニーグは涼しい顔をしたままだ。そのままケツアルに対して言葉を続ける。

「間違いないですね」

「はい」

ケツアルもほくほく顔で頷く。

「これで間違いなく。いやあ、助かります」

「マジエンカはどうなるんだ」

クルシナはそれを見て恥々しげに咳いた。

「呆れた話だ。こんなことがあつてたまるか」

「その通りだ」

村人達も彼と同じ意見であった。

「そんなに金が大事か」

「恥知らずが」

彼等は口々にそう非難し続ける。だがイエニークはやはり涼しい顔をしたままであった。

第三幕その一

第三幕 最後は幸福に

イエニークのことはすぐに村中に広まつた。それを聞いて憤りを覚えない者はいなかつた。

「とんでもない話だな」

「全くだ」

「マジエンカが氣の毒だ」

彼等は口々にそう言い合つ。だがその中で一人別のことを考へてゐる者がいた。

「どうなるのかなあ」

ヴァシェクは自分のことだけを考へていた。そして一人溜息をついていた。

「母さんも父さんも反対するに決まつてゐし。僕に味方はいないのかな」

「あら、ヴァシェクじゃない」

そこに黒い髪の小柄な女性がやつて來た。赤い民族衣装に身を包んでいる。その顔立ちは如何にも利発そうで可愛らしいものであつた。美人ではなかつたがよい印象を受ける顔であつた。

「あ、先生」

「どうしたの、こんなところで」

黒い翡翠の様な目で彼を見上げる。ヴァシェクはそれだけで胸の鼓動が高まるのを感じていた。この黒い髪と目女性がエスメラダである。ヴァシェクの想う人である。

「ちょ、ちょっと考へていまして」

「何を考へていたのかしら。言つてみて」

「けど」

だがヴァシェクは口籠もつてしまつていた。

「先生にはあまり関係のないことですし」

「私には関係のない」と

「は、はい」

彼はそう言つて誤魔化した。

「そうなの。何だかわからないけれど」
それ以上聞こうとはしなかつた。気にはなつたがとりたてて聞く
までもないと思つたからだ。

「まあいいわ。それじゃあね」

「はい」

「それにしても。私も早く身を固めたいわ」

そう言いながらエスメラダは何処かへ行つてしまつた。ヴァシエ
クはその後ろ姿を見送り一人溜息をついた。

「ああ」

そして側にあつた切り株の上に腰掛ける。それからまた溜息をつ
いた。

「はつきり言えたらなあ。どうして言えないんだろう」

彼にとつてそれがツ最大の悩みであり苦しみであった。

「何とかしたいけれど。何にもできないな」

困つていた。だがそんな彼を神は決して見捨ててはいなかつた。

「あれか」

それを遠くから見る一つの影があつた。

「話には聞いていたけれどあまり活発そうじやないな。どうやら噂
通りみたいだ」

「先生に何とか告白したいけれど」

「先生？ はあ」

その影はそれを聞いてその先生が誰かすぐにわかつた。

「あの人か。何だ、あいつはあいつで困つていたのか」

影はそれに気付いてにんまりと笑つた。

「これは好都合だ。あいつを先生と一緒にさせればさらうこう

「けれどどうやって先生と一緒になるつか」

「そんなのは簡単だな」

「ああ、どうすれば」

「頭は抱える為にあるんじゃないか。抱える為にあるんだ」
やう言つてヴァシックの前に出て来た。黒い上着と白いズボンの
若者であった。

「君は?」

「僕かい?」の村の者や

「やうだつたの。はじめまして」

「はじめまして。ヒルガード君はヴァシック君つてこうんだね
「はー」

ヴァシックは答えた。

「ミーハさんといの娘さんと結婚する予定らしいね

「ええ」

それにも素直に答えた。なお素直では時として命取りにもなる。
「けれどあまり嬉しそうじゃないね。どうしてだい?」

「それは」

彼は「」で口もつた。

「エスマーラダ先生と結婚したんだが、本当せ

「えつ」

思つていた」とを言つてギョッとした。

「何でそれを」

「わかるさ。君の顔に書いてあるから」

「僕の顔に」

「そうや。君は結婚したいんだが、先生と」

「はー」

「けれどそれはお父さんとお母さんが反対するから言えないんだな」

「わかりますか」

「わかるや。僕は君のお父さんとお母さんも知つてゐるからね」

お母さんと言つたところで彼の顔が一瞬だが歪んだ。しかしヴァ
シックはそれには気付かなかつた。一瞬であつたしぶんやりとした
彼には気付かないことであつたからだ。

「それでも本音じゃ何とかしたいだろ」「はい」

「けれどどうしたらいいかわからない。違うかな」「どうしてそんなことまでわかるんですか?」「僕は何でも知っているのぞ」

若者はにこりと笑つてそひ答へた。

「何でもね」「何でもね」

「まるで嘘みたいだ」

「嘘じやないひ。僕は君に対しては嘘はつかないよ」「本当ですか?」「はい」

「ああ。だから僕の嘘いつひとをよく聞いてね」「はい」

ヴァシュクは頷いた。

「お願いします。どうしたら先生と一緒にられますか?」「はい」

「それはね。ケツアルさんがいるね」「結婚仲介人の」

「彼に言つんだ。この村の娘さんと結婚するつて」「はい」

「けどそれじやあわからないんじや」

「わかつていなね。この村の娘さんだよ?」「それが何故」

「君はマジエンカと結婚する予定だね」「はい」

「マジエンカはこの村の娘さんだね」「ええ、そうですけど」

「そしてエスメラダ先生も。この村の生まれだよね」「あつ」

そこまで言われてようやく氣付いた。イヒークはそれを見て心の中で思つた。
(やはりとろいな)

しかしそれは心中だけであった。外見上は冷静にそのまま言葉

を続ける。

「これでいいんだ。後は先生をどう納得させるかだけれど」

「それはどうすればいいですか？」

「またケツアルさんにお願いしよう」

「ケツアルさんに」

「そう。あの人にエスメラダ先生のことを頼むんだ。確かあの人もそろそろ身を固めたいと思っていた筈だし」

「都合がいいですね」

「人間の世界つてやつはね、神様に都合よくできているのさ」
イエニークの言葉は少しシニカルであった。

「要是は神様がどう考えて何をしたいのか、それをわかつていればいいんだよ」

「そうなのですか」

「そうや。じゃあいいかい」

「はい」

「先生にはね、こう言つてもうつんだ。この村で自分を真剣に愛してくれる若者と結婚したい、とね」「自分を真剣に愛してくれる若者」「それは君のことさ。これでわかつたね」「成程、そういうことだったのですか」「そうさ。まあそつちはそれで大丈夫かな」「はい、有り難うござります」「ちょっと待つた」

だがイエニークは「こ」でヴァシェクを呼び止めた。

第三幕その一

「ケツァルさんにはね、いい話があるって言つて切り出すんだよ」「いい話が」

「そういう。あの先生はお金が好きだから。儲け話には飛びついてくるよ」

「本当に貴方は何でも知っているんですね」

ヴァーシュは思わず感嘆の声を漏らした。

「素晴らしいです。どうしてそんなに」

「色々とあつたからね」

「ここのでまた表情が一瞬曇つた。だがヴァーシュはそれには気付ちはしない。

「色々と」

「うん。まあそれは君には関係ないことだ」

「そうですか」

「だから気にしなくていいよ。それより」

「はい」

「後肝心なのはマジエンカのことだけれど」

「マジエンカ」

それを聞いたヴァーシュの表情が一変した。イエニークもそれに気付いた。

「どうしたんだい?」「

「彼女とだけは嫌です」

「何かあつたのか」

「あつたと何もとんでもない女の子らしいですね」「とんでもない」

「はい。我が儘で浮氣者だとか。僕そんな人と一緒にはなりたくないですね」「おやおや」「ないです」

話を聞きながら好都合だと思った。だが彼は「」で別のことを考えていた。

(誰かに吹き込まれたのかな)

「ねえ」

彼はヴァシュクに尋ねた。

「そのマジコンカのことは誰から聞いたのかな」

「誰か」

「うん。何かとんでもない娘みたいだけれど」

「可愛らしい娘さんからです」

「可愛らしい娘さんから」

「はい。小柄で青い目に金色の髪の。ぱしありとしていました」

(ああ、彼女か)

イエニークにはすぐに見当がついた。

(向こうも向こうで動いていたか)

それがわかり内心ほくそ笑んだ。中々面白いことになつていると
思った。

「その娘に言われたんだね」

「ええ。それは本当でしょうか」

(何と答えようかな)

ヴァシュクを見ながら考える。彼は如何にも不安そうにしている。

それを見て決めた。

「その通りさ」

「」は彼女の言ひ通りにした。

「そうなんですか」

「そうさ、だから絶対に止めた方がいい」

「絶対に」

「彼女と結婚したら君は不幸になる」

「不幸に」

「人生は滅茶苦茶になつてしまつ」

「そんなに」

「そりゃ。だから彼女との結婚は絶対に止めた方がいい。わかったね」

「は、はい」

真っ青になつてそれに頷く。ぶんぶんと首を急かしく縦に振る。

「これでわかつたね。君はエスメラダ先生と結婚するべきだ」

「はい」

「間違つてもマジエンカと結婚しちゃ駄目だよ。いいね」

「わかりました」

「それならよし。じゃあ行つてくれ」

「何処に」

「ケツァルさんのところだよ。すぐに行つた方がいい」

「わかりました」

こうしてヴァシェクもすぐに姿を消した。行く先は決まつていた。イエニーエは彼を見送つて一人ぼくそ笑んでいた。

「これで手は全て打つたかな」

しかしそまだやるべきことはあつた。そして彼は動いた。

「最後はやっぱり彼女を何とかしないとな」

そう言いながら彼も何処かへ去つた。後には誰も残つてはいなかつた。次の騒ぎの前置きであるかのように沈黙がそこを支配していった。

ケツァルに話をしエスメラダにそう言つてもうつたヴァシェクはまた一人ぼんやりと考えていた。

「これで僕と先生は結婚できるのかなあ」

そう思つと嬉しいがやはり不安はあつた。

「できたらいいけれど」

もしこれできなかつたならば、そう思つと不安で仕方ないのである。それでも考えずにはいられない。そこへケツァルがやつて來た。

「ヴァシェク君、ここにいたか」

「あ、ケツァルさん」

彼はケツァルに顔を向けた。

「どうしてここに」

「どうしてつて君を探していたんだよ」

彼はそう答えた。

「僕ですか」

「そうや。まずはエスメラダ先生だけれど」

「はい」

「この村で自分を真剣に愛してくれている人と結婚するやつだ。快く承諾してくれたよ」

「本当ですか！？」

「ああ。そして君のことだけれど」

「はい」

「この村の娘さんと結婚するんだね」

「はい」

ヴァシヨクはそれに頷いた。

「間違いありません、その通りです」

「ふむ、ならない」

彼はそれを聞いて納得した。

「何か引っ掛かるが」

「気のせいですよ」

慌ててそう返す。

「そうかな」

「そ、そうです」

さりに慌てて言い繕つ。

「だから気にならないで」

「だといいけれどね」

半信半疑ながらとりあえずは納得することにした。そして話を進

めることにした。

「あの娘がこの村の娘であることには変わりないしな」

「ええ」

「じゃあこれにサインをお願いできるかな」

そして懐から新しい契約書を出した。そこにはヴァシェクがこの村の娘と結婚すると書いてあつた。クルシナの娘ではなくなつた。だがミーハの息子の部分だけは同じであつた。

「いいかい」

「はい」

「おお、そこにいたのか」
しかしここで地味だがパリッシュした民族衣装に身を包んだ中年の男女が姿を現わした。見れば男は何処かヴァシェクに似た顔をしていて髪はイエニーグのものと同じ色であつた。女の方は髪と目の中色がヴァシェクと同じであった。

「あ、お父さんお母さん」

ヴァシェクは一人を見てそう言つた。

「どうしてここに？」

「どうしてつて探したんだぞ」

二人はとぼけた様子のヴァシェクに対してそう言葉を返した。

「一体何処に言つっていたのか。心配したんだ」

「そうだったの」

ヴァシェクはそれを聞いて申し訳なさそうな顔になつた。

「御免なさい、心配かけたね」

「わかればいいんだけれどな」

「結婚するんだから。もう少ししつかりして欲しいわね」

「いや、ミーハさんハーダさん」

だがケツアルはそんな二人を安心させるように穏やかな声で二人の名を呼んだ。

「何か」

「御心配には及びませんよ。私がヴァシェク君についておりますから」

そう言つて胸を張つた。次にその胸を左の拳でドンと叩く。

「そうですか」

「はい、ヴァシェク君は絶対にマジンカさんと結婚できますよ」

「マジエンカと」

「それを聞いたヴァシェクの顔が青くなつた。

「そうなつたら僕は不幸に」

「何があつたのかい？」

「ケツァルだけでなく彼の両親もそんな彼を見て心配になつた。

「何かあればお言いよ」

ハータは特に心配そうであつた。母親であるが為か。

「う、うん」

「御前には絶対に幸せになつて欲しいからね」

「幸せに」

「そうさ。だからしつかりしておくれ。いいな

「うん」

ヴァシェクは母親に言われながらもその顔を青くさせたままであつた。だがここで先程の若者と新しい契約書のことを思い出した。そしてその青い顔を元に戻した。

第二幕その二

「わかつたよ。僕幸せになる」
「そう、そうなつておくれ」
ハーダはそれを聞いてようやくほつとしたよつであつた。
「そうでなければ困るから」
「善人は幸せにならなければなりません」
「ここでケツァルはこう言つた。
「ヴァシエク君、だから君は幸せになるんだよ」
「なれますか」
「神様がそうしてくれると」
「間違いないですね」
彼は急に元気になつてそう問つてきた。ケツァルはそれに少し面食らいながらも言葉を返した。
「勿論だよ」
「そうか、なら大丈夫ですね」
「少なくとも君にはね」
「はい。じゃあ僕は結婚します」
「うん」
「この村の娘と。そして幸せになります」
ここで彼は村の娘とだけ言つた。ケツァルもミーハもハーダもそれはマジエンカのこととばかり思つていた。だがそれは果たしてどうなのか。彼等はよく考えてはいなかつた。
「なあマジエンカ」
マジエンカの家の前でクルシナヒルドミラがマジエンカに話をしていた。わりかし立派な家である大きく、しかも新しかつた。煉瓦の家であり小屋に水車もあつた。
「信じてくれないか」
「どうして信じられるのよ

マジエンカはむくれた顔で両親にそつ言葉を返した。

「お父さんもお母さんも嘘を言っているのよ」

「嘘だと思うのかい？」

ルドミラが娘にそう尋ねた。

「親が娘を騙すとでも思うのかい？」

「わし等が御前に一度でも嘘をついたことがあるか？」

「うう」「うう

その通りであった。二人は村でも正直者として通っている。マジエンカに対してもそうであった。彼女は両親が嘘をついたことを見たことも聞いたこともなかった。

「確かにそうだけれど」

「ならわかるな」

「いえ」

しかし首を横に振った。

「それでも信じられないわ」

「どうしてなんだい」

「わしはこの目と耳で確かめているのだぞ」

「それはわかるけれど」

マジエンカは戸惑いながら言った。

「それでもどうしても信じられないの」

「わし等の言うことでもか

「だつて」

マジエンカはまた言った。

「イエニークが私を売ったなんて。それもお金で

「しかし本当のことなんだよ」

「彼はお金にはあまり執着していないわよ

「しかしだな」

「いつも頭を少し使えば手に入れられるって言つてゐるし

「頭を使えば、だな」

「ええ」

マジエンカは父の言葉に頷いた。

「いつも言つているわよ。それが何があるの？」

「それだ」

クルシナはその言葉を指摘してきた。

「頭を使えば、と言つたな」

「ええ、確かに」

「それなんだ。あいつは悪知恵を使つたんだ」

「悪知恵を？」

「そうさ。それで御前を売つたんだ。金を手に入れる為にな」

「まさか」

「しかし本当だとしたら？」

「そんな筈ないわ」

狼狽しながらもそつ答える。

「だつて彼は」

「わしの目と耳が証人だ」

「お父さんの言葉を疑うのかい？」

「そんなことはないけれど」

マジエンカの顔が次第に困つたものになつてきた。暗い雲が覆いはじめていた。

「けれど」

「否認しきれるか？」

「・・・・・・・・・・」

マジエンカは遂に答えられなくなつてしまつた。父が嘘をついているとは思えないからだ。

「な、わかつたる」

クルシナはここで娘に対して言つた。

「御前は売られたんだ、あいつに。裏切られたんだ」

「もうあんな男のことは忘れておしまい。それが御前の為なんだよ

「そうなの」

「そうさ。いいね、マジエンカ」

ルドミラの声がさらに不安に覆われていく。

「大人しくミーハさんの息子さんと結婚しなさい。少なくとも御前を騙したりはしないから」

「私を騙すなんて」

「もう一度言うぞ」

クルシナの声が険しくなった。

「私が御前に嘘をついたことがあるか！？」

「…………いえ」

頷いた。遂にそれを認めたのであつた。

「お父さんが私に嘘をつくなんて。考えられないわ」

「そういうことだ」

「マジエンカ、わかつたね？」

「…………ええ」

母の言葉にも頷いた。

「よく考えてみる。それで結論を出すわ」

「そうだ、それがいい」

「本当によくお考えよ。人間つてのは心が一番大事なんだから

「心」

マジエンカは呟いた。二人は彼女を一人にした。よく考えさせる為であつた。

一人になつた。そして考えようとしたができなかつた。かわりに涙だけが零れてきた。

「こんな・・・・・・」

その青い目から大粒の銀の涙が零れる。

「こんなことつて・・・・・・」

信じられなかつた。だが嘘ではない。それがわかっているからこそ辛かつたのであつた。

泣いていた。悲しかつた。これ程悲しかつたことはこれまでなかつたことであつた。

涙が止まらない。それでも何とか考えられるようになつた。しか

しそれでも信じられなかつたのである。

「嘘よ、イエニークが」

「彼が自分を売る筈がないとまだ思つていたのであつた。

「彼から直接話を聞かないと。何もわからないわ」

だが何処にいるのか。それすらもわからなかつた。

何とかしたい、だができない。そのジレンマが彼女を苦しめていた。

「彼がいなくなるだけでも耐えられないのに。そんなことが信じられる筈もないのに」

言葉を続ける。

「一人なら何処にいても平氣なのに。私は夢を見ているの?恋の薔薇が散つてしまつたの?一体何が起こつたというの?私を不幸が覆つているの?これはどういふことなの?」

混乱してきた。それでも涙は零れ続ける。それでもう服が濡れそぼつてしまつていた。

彼女は何処かへ去つた。眞実を知る為に。その眞実が残酷なものであるかどうかはもう考えることができなくなつっていたのだが。そしてイエニークを見つけた。彼は教会の側の酒屋で一人黒ビールとソーセージを楽しんでいたのであつた。彼がどういった時にそれを口にするのか彼女も知つていた。

「やあマジンカ」

彼は今の彼女が何を思つているのか知らないのか軽やかに声をかけてきた。

「どうしたの、そんなに焦つて」

「焦つてなんかいな」

マジンカは憔悴した顔で彼にそう答えた。

「イエニーク、話は聞いたわ」

「話!?」

「とぼけないで。三〇〇グルデンのことよ」

「ああ、あれか」

「！」「
それを聞いて真実だとわかった。彼女の顔が割れんばかりに壊れ
た。

第二幕の四

「本当だつたの・・・・・・・・」

「マジエンカ」

イエニーケの顔が急に真撃なものとなつた。そして彼女に声をかけてきた。

「話を聞いて」

「嫌よ！」

だが彼女はそれを拒絶した。

「それは本当だつたのね！」

「ああ」

彼はそれを認めた。それがマジエンカの心をさうひかき乱した。

「署名したのね！」

「君に嘘は言わない

「売つた癖に！」

「売つてなんかいない

「それが嘘なのよ！」

「マジエンカ」

イエニーケの声がさらに真面目なものとなつた。

「本当に話を聞いて欲しいんだ」

「私の耳は嘘は聞こえないの！」

彼女はそう叫んだ。

「そして私の口は真実しか言わない！」

「マジエンカ・・・・・・」

イエニーケはそれでも諦めない。何とか話を聞いてもらおうと努力していた。

「本当のことを聞いてくれないのかい？」

「それはお父さんから聞いたから」

「クルシナさんから？」

「そうよ」

「彼が正直者である」とはイエニークも知っていた。話がついでやこしくなると思った。だがそれでも彼は言った。

「それでも聞いてくれないか」

「まだ嘘を言つて…？」

「嘘なんかじやないんだ」

「それを嘘つて言つて…」

「そして言つた。

「もういいわ、決めたわ」

「何を？」

「私結婚するわ、ミーハさんの息子さんと」

「ミーハさんの息子と」

それを聞いたイエニークの顔が急に晴れやかになつた。マジエン力はそれを見てさりににきりたつた。

「それがおかしいっていうの！？貴女と結婚しないのよ…」

「君は今自分が何を言つたのかわかつているね」

「勿論よ」

キツとしてそつ返した。

「何度も言つわ。ミーハさんの息子さんと結婚するわ。また言いましょうか？」

「いや、いいよ」

彼はにこりと笑つてそれを制止した。

「ミーハさんの息子さんとだね。よくわかつたよ」

「やつぱつ」

マジエンカの顔が赤から青に変わつた。怒りのあまり血の気が引いてきたのだ。

「私を売つたのね」

「それは違う」

「違わないわ！」

「だから聞いてくれつて

「聞くことなんか！」

「まあ待ちなさい」

騒ぎを耳にしてケツァルが仲介にやつて来た。

「事情はどうあれ喧嘩はよくないですぞ」

「あ、ケツァルさん」

イエニークは彼の姿を認めて言い争いを止めた。

「丁度いいところへ」

「人々が必要とされるところに現わるのが私ですから」

彼はにこやかに笑つてそう返した。

「それで何のことですそんなに言い争つておられたのですか？」

「いえ、何」

イエニークは落ち着いて彼に言つた。

「契約書のことですね。二〇〇グルテンの」

「何て白々しい」

マジエンカはそれを聞いてまた怒りはじめた。だがイエニークは冷静であった。

「あれは間違いありませんね」

「ええ、勿論です」

ケツアルは笑顔でそれに応えた。

「確かに。マジエンカさんはミーハさんの息子さんと結婚する」

「はい」

「そして貴方は二〇〇グルテンでその権利を譲つた。確かにそうあります」

「そうですね。それはケツアルさんもよくわかつておられますね」

「ええ。イエニークさんの御好意は忘れません」

「好意！？何てこと」

マジエンカは怒つたままであった。

「私を売つておいて」

「まあマジエンカさん」

ケツアルが宥めるが一向に聞こえとはしない。

「私は彼をもう一度と見たくないわ」

「それで」

イエニーエはそれを聞いて一瞬だけであるがその緑の目を悲しくさせた。しかしそれは一瞬だったのでもジエンカにもケツアルにもわからなかつた。

「ミーハさんの息子さんで間違いはないんですね」

「何度も申し上げますよ」

ケツアルは上機嫌であつた。

「イエニーエさんは承諾して下さいました」

「そう」

「三〇〇グルテンで」

「またお金の話！」

マジエンカはもうお金の話など聞きたくもなかつた。

「マジエンカさんとミーハさんとの息子さんの結婚を認めて下さいました。それに間違いはありません」

「そうです。マジエンカ、聞いたね」

「裏切りを聞かせるつもりなの！？」

マジエンカは怖い顔になつた。まるで魔女のようであつた。

「違う、そうじゃない」

「私にはそうとしか思えないわ」

「信じてくれ」

「どうしたらそれができるのか私の方が知りたいわよー」

「そうじゃない。はつきり言おつ

「何を！？」

イエニーエを睨みつける。

「ミーハの息子は君のことを愛していると。これでもまだわからないのかい」

「そんなに私をあの男と結婚させたいの！！」

さらに怒りが増した。これも当然であつた。どう見ても火に油を注いでいるだけであるからだ。ケツアルもそれを見て流石に首を傾

げてしまっていた。

「彼は何を考えているのだろう？」

それが最初の感想であった。

「こんなにあの娘を怒らせて。怒らせても何にもならないというのに

彼の考えも当然であった。普通ならそう思つ。だがイエニークは全く違つたのである。これは彼が普通ではないからなのであるうか。どうも違うようである。

「いい加減にして！」

「だから信じてくれ！」

「人を呼ぶわよ！」

「呼べばいい！」

殆ど売り言葉に買ひ言葉であった。

「それで君がわかつてくれるのなら」

「わかる必要はんてないわ！」

「いや、待つてくれ」

ここで誰かの声が聞こえてきた。

「え！？」

それを聞いてマジエンカが少し落ち着いた。

「マジエンカ、まあ落ち着いて」

「気持ちはわかるけれど」

見れば村人達であった。彼等も騒ぎを聞きつけて集まつてきたのである。

「皆」

「話は知つてゐるよ。イエニーク」

「うん」

彼は不思議な程落ち着いていた。少なくとも村人やマジエンカからはそう見える。

「本当に御前さんはとんでもない奴だな。まだ言つうか」

「見損なつたよ。ここまで腐つた奴だったなんて」

「女の子を泣かして楽しいか？」

「別に泣かしてはいないよ」

「彼はしつれっとした態度でそう答えた。

「僕はマジエンカに本当のことを言いたいだけなんだ」

「一つ言っておくよ」

村人の一人がそれに応えた。

第三幕その五

「本当のことのはな、時として人をどん底に落すものなんだ」「人間なんてそんなもんだしね」

それに他の者も頷いた。

「知らなくていいことだって一杯あるんだ」

「それを無理にでも教えようとするのは悪魔の行いだ」

「ましてやあんたは、売つたことをそれ程言い募りたいのか?どこまで恥知らずなんだ」

「そうだそうだ」

他の村人達もそれに同意する。

「あんたみたいな奴を見たことがない。何処まで卑しいんだ」

「恋人を売つて。そしてまだ騒ぎたてるなんて。それでもこの村の人間か」

「イエニーク!」

マジエンカも叫んだ。

「私このことを忘れないから!私を売つたことを死ぬ程後悔させて

やる!」

「えつ、マジエンカ!?」

そこへヴァシェクもやつて來た。彼はそれを聞いて驚きの声をあげた。

「あの」

「あれ、君は」

イエニークはヴァシェクを見て彼に顔を向けた。

「貴方は」

ヴァシェクの方も彼に気付いた。

「何かあつたんですか?それにこの女人人は」

「まずい」

マジエンカはヴァシェクの顔を見て苦い顔をした。

「僕にクルシナさんとの娘さんのことを教えてくれた人なんですねけれど」

「！？どうじうことだ」

村人達はそれを聞いて眉を顰めた。

「なあヴァシェク君」

「はい」

ヴァシェクに問う。彼は正直にそれに顔を向けた。

「君さつきこの娘さんからマジンカについて聞いたと言つたね」

「ええ」

「それは本当なのかい？そしてどんなことを聞いたんだい？」

「本當です。そして浮氣者で急け者で派手好きなどんでもない人だと聞きました。だから絶対に結婚はしない方がいいと。これははつきり覚えていますよ」

「そうなのか」

村人達はそれを聞いて頷いた。

「マジエンカはヴァシェクとは結婚したくないのか

「何か話がややこしくなってきたな」

「いやそうじやないな」

しかしイエニークだけが笑っていた。

「これはかえつて好都合だな。なあヴァシェク君

「はい」

ヴァシェクに話を振つてきた。

「何でしょうか」

「君は本當は誰と結婚したいんだい？正直に言つてくれ」

「えつ」

それを聞いて戸惑つた顔になつた。

「けれど」

「僕が君の安全を保障する。それでも駄目なのかい？」

「本當ですね？」

「勿論だ」

「本当かね」

「まさか」

村人達は誰も信じよつとはしない。だがヴァシェクは違つた。何と彼はイエニークを信じることにしたのだ。

「わかりました」

「へつ！？」

それを聞いて皆眉を奇妙な形に曲げた。

「何だつて！？」

「ヴァシェク、正氣かい！？」

「はい」

彼は迷いもなくそう答えた。

「僕にもよくわからないけれど」

彼は戸惑つたままそう答える。

「この人は信じられる。そう思つんですね」

「馬鹿な」

「どうやつたらそうそう考えられるんだ」

村人達は口々にそう言つ。だがヴァシェクはイエニークを信じたのであつた。

「僕の好きな人は」

「君の好きな人は」

「エスマラダ先生です。先生を真剣に愛しています」

「よし」

イエニークはそれを聞いて会心の笑みを浮かべた。そして村人とケツアルに対して言つた。皆あまりのことに目をパチクリとさせていた。

「今の言葉、聞きましたね」

「聞きましたね、つて」

「何が起つたんだ。これは一体どういうことなんだ」

それはマジエンカも同じだつた。怒りを忘れて呆然としていた。

「これはどういうことなの！？ヴァシェクがそんな」

「マジエンカ」

彼は前に出て来た。そしてマジエンカに声をかけてきた。

「何…？」

「あらためて言つよ。ミーハの息子は君を愛していふと。この世の何よりもね」

「何よりも。けれどそれは誰なの…？」

彼女にはもうわけがわからなくなつていて。他の者もある。

「どうなつてゐるんだ…？」

「さあ」

もう誰にも何が起つてゐるのかわからない。イエーラーク以外には。

「落ち着いてね」

「またその言葉を」

マジエンカはさうに訳がわからなくなつた。

「どうして私にそんなに落ち着けつていつの…？本当にわからないわ

「君に眞実を言つ為や」

「それも」

彼女にはわからぬことばかりであった。他の者も。「もう一度言つ。ミーハの息子は君を愛していふんだ

「けれどそれは僕じゃない」

「そうや」

ヴァシェクに對してそう答える。

「君はマジエンカとは結婚したくはないんだね

「はい」

「何つ

それを聞いて驚いたのはケツアルであった。

「これは一体どういふことなんだ」

「ケツアルさん」

ヴァシェクが彼に顔を向けてきた。

「何だい」

「僕は村の娘さんと結婚するつて言いましたね」

「ああ」

「けれど僕はマジンカとは結婚するつもりはないんですよ」

「それはどうこいつなんだ！？」

「ケツアルもせらにこんがらがつてきた。

「話がわからないのだが」

「僕にわかつておりますよ」

イエニーグだけがその中で冷静だつた。

「そのミーハの息子は」

「誰なの？」

マジンカが問うた。

「今君の田の前にいる」

「えつ！？」

「けれど僕じゃない」

「そりや。ヴァシク、聞いたことはないかい」

「何ですか？」

「君のお父さんは今のお母さんと結婚する前に結婚していたね」

「あ、はい」

それはヴァシクも聞いていた。

「そういえばそうでした。お父さんから聞いたことがあります」

「うん。もう亡くなつてしまつたけれど」

「はい。凄く綺麗な人だったつて。お父さんが話していました」

「そのお母さんのことで聞いたことは他にないかい？」

「他にですか」

「そうだ。覚えているかな、何か」

「ええと」

そう問われて考え込んだ。必死に思い出していた。

「確か」

「確か？」

「確か？」

「僕のお兄さんがいたとか

「えつ！？」

それを聞いたケツァルが驚きの声をあげた。

「そんなことは聞いてはいないぞ」

「それは貴方の落ち度ですよ」

イエニーケはやんわりとそう答えた。

「ちゃんと調べておくべきでしたね」

「何と。それは嘘だと思っていたのに」

「それでヴァシエク君」

「はい」

「そのお兄さんはどうなったかは聞いているかな

「そうですね」

彼はまた考え込みながらそれに答えた。

「確かに死んだとか。流行り病で」

「そう聞いたんだね」

「はい」

「けれどそれは嘘だ

「えつ！？」

「彼、君のお兄さんは死んではないんだ」

「ううなんですか

「何でそれを知っているのかね！？」

ケツァルが不安を抑えきれずイエニーケにそう問いつてきた。

第三幕その六

「君が

「何故だと思いますか？」

「まさか

マジエンカは余裕に満ちた笑みを浮かべるイエニーカを見て気付いた。だが村人達は呆気にとられたままである。あまりにも色々と進んでいるので完全に取り残されてしまっていたのだ。

「何が何だか

「そういえばミーハさんとこにいたような

年配の者の中にはそう呟く者もいる。だが皆混乱していく何が何だかわからていながら実情であった。

「そのミーハさんの死んだとされちえる息子は

「息子は」

皆、「クリ」と息を飲んだ。固睡を飲んでイエニーカの次の言葉を見守る。

「それは

「それは

だがここで場の空気が変わった。よりによってクルシナとルドミラ、そしてミーハとハーダが来たのであった。

「マジエンカ、そこにいたのか

「ヴァシエクも」

「お父さん」

「どうしてここに?」

「どうしてもこうしてもじゃないよ

ミーハは息子に対してもじやないよ

「好都合だな」

イエニーカはミーハとハーダの姿を認めて一人ほくそ笑んでいる。

だがそれは誰にも気付かせはしなかった。周到であった。

「ヴァ・シェク、御前契約書の文章を変えてもらつたそうだな

「うん」

「村の娘さんと結婚するつて。どういふことだ」

「それは・・・・・・」

「説明してくれ。何故そうしたんだ?」

「口ヒもる息子に對してそう問う。

「怒らないから。言つてくれ」

「そうだよ。御前のことなんだからね。頼むよ

「それは僕が説明しましょう」

「あつ・・・」

二人はイエニーエクの顔を見て思わず叫んでしまつた。

「御前、どうしてここに!?」

「この村に帰つていたのかい!」

「ええ」

イエニーエクはこりこりとして一人に對して答えた。

「この前に久し振りだね」

「やつぱり」

マジエンカはそれを見てわかつた。顔が急に晴れやかなものとなつていく。だがケツアルはそうではなかつた。彼はまだわかつていなかつた。

「どういうことなんだ!?」

首を傾げていた。

「久し振りだなんて。知り合いだつたのだろうか

ミーハの息子のことには頭がいかなかつた。そこが迂闊であつた。

「戻つてくるなと言つた筈だよ」

ハータがイエニーエクを睨みつけてそう言つた。

「それでどうして

「それは僕の自由なので」

イエニーエクは涼しい顔でそう言葉を返す。

「別に法律で追い出されたわけじゃないんだからね。違うかな」

「くつ」

「確かにそうだな」

ミーハは困った顔をして彼にそう述べた。

「だがな」

「言いたいことはわかつてゐるよ」

イエニーケは手で彼を制しながらそつと言つ。

「けれど僕は言わせてもらつよ」

「何をだ！？」

「何を言つつもりなんだ、彼は」

村人達はさらに戸惑いの声を囁き合つてゐた。今はイエニーケとマジエンカだけが冷静であつた。

「マジエンカ」

イエニーケはマジエンカを見ていた。

「イエニーケ」

マジエンカもイエニーケを見ていた。二人は互いを見ていた。

「今やつと言えるね」

「そうね、ずっと気付かなかつたわ」

「まさか」

それを見てケツアルも村人達もようやく気付いた。

「彼は」

「ミーハさんとこの」

「君と一緒にになりたい。いいかな」

「ええ、喜んで」

マジエンカはイエニーケを受け入れた。これで決まりであつた。

「な、ど、どういうことなんだ」

ケツアルは憑き物が落ちたように騒ぎはじめた。

「彼がミーハさんの息子だなんて。こんなことがあるものか

「言いませんでしたっけ」

ミーハは少し驚いた顔をして彼に問つた。

「いえ」

「あれ、おかしいな」

「私が言わなかつたのよ」

ハーダは苦虫を噛み潰した顔でそう言つた。

「どうしてだい？」

「この村にいないと思つたから。いなかつたでしょ」

「確かに」

ミーハはそれに頷いた。

「少なくともわしが今知るまではそうだつたな」

どうもヴァシェクは彼に似たようである。見れば表情までそつくりであった。これが遺伝というものであるうか。

「だが一つ問題ができたな

「何？」

「ヴァシェクのことだよ。イヨニークがマジョンカさんと結婚してしまつた。ヴァシェクには相手がいなくなつた

「ヴァシェク、御前はそれでいいのかい？」

「よくはないよ」

彼は母にそう答えた。何故か落ち着いていた。

「僕はマジョンカさんと結婚する予定だつたみたいだから。けれど

ね

「けれど。何だい？」

「ヴァシェクの相手はちゃんといるからな」

「うん、兄さん」

彼は今ここではじめて彼を兄と呼んだ。

「また兄さんの力を借りたいけれどいいかな」

「ああ」

兄は弟に對して快く頷いた。そしてケツアルに顔を向けた。

第二幕その七

彼は我に返つていたが怒りに震えていた。まんまと出し抜かれたからに他ならなかつた。言いくるめたつもりが逆に罠にかかつていつたからであつた。彼は人を罠にかけたりするのは好きなタイプであるかも知れないが罠にかけられるのは嫌いであつた。

そんな彼に声をかける。

「ケツアルさん」

「何ですかな」

ケツアルは不機嫌そのものの顔をイエニークに向けてきた。明らかに怒つていた。

「お話があるのですが

「私には貴方のお話を聞く耳はありません」

彼はそう返した。声も怒つていた。

「そう言わずに」

「聞こえませんね」

耳を両手で塞いだ。

「ほら、こうしていきますから」

「お金の話でもですか？」

「何！？」

どうやら耳に栓をしていてもお金の話は耳に入るらしい。不思議な耳である。

「今何と仰いました？」

「ですからお金の話と。お仕事の依頼ですよ」

「仕事の」

「はい」

イエニークは頷いた。

「どうでしょうか」

「額は

「三〇〇グルデン」

「三〇〇グルデン」

それを聞いたケツァルの顔が一変した。

「それは本当ですか！？」

「はい」

イエニーグはにこやかに頷いた。

「ヴァシェクとこの村の小学校のエスメラダ先生の結婚を仲介して欲しいのですが」

「三〇〇グルデンですか」

「はい。如何でしょうか」

「喜んで」

ケツアルはにこやかに笑つてそれを引き受けた。

「ヴァシェク君とエスメラダ先生ですね、それならお安い御用です
「そんな簡単にいくんですか？」

ミーハは怪訝そうな顔をして彼に尋ねる。

「勿論です」

「確かにヴァシェクとマジンカの時もそんなことを言つていたよ
うな」

「今日は確実です」

彼も商売人である。自分のミスはそうおいそれとは認めない。

「何故なら今回は契約書に抜け道はないのですから」

「ほう」

「いいですかな」

彼は胸を張つて言いはじめた。

「ヴァシェク君はこの村の娘さんと結婚する」

「はい」

「抜け道まみれじゃないですか」

ハーダがそれを聞いて突つ込みを入れる。だがケツアルは平然と

していた。

「話は最後まで聞いて下さいね」

「はあ」

それに頷くしかないハーダであった。彼は説明を再開した。

「エスメラダさんは彼を真剣に愛する者としか結婚できない。そしてその若者とは」

「僕です」

「ここでヴァシェクが名乗りをあげた。

「僕も今ここで言います。エスメラダ先生を心から愛しています。そして先生と結婚したいです」

「何と」

「ヴァシェクも言つたぞ」

「あのはにかみ屋が」

村人達はまた驚きの声をあげた。

「何とまあ」

「驚き過ぎて心臓が破裂しそうだよ」

ミーハもハーダも驚きを隠せないでいた。そこにまた誰かが現わされた。

「話は聞いたわ」

「おつ」

皆その誰かの姿を認めて楽しそうな声をあげた。

「よく来てくれた」

「真打ち登場だな」

「どういたしまして」

誰かは村人達の声にこやかに応えた。それは他ならぬエスメラダであった。

「先生」

「ヴァシェク君」

エスメラダは戸惑うヴァシェクに対して問う。両手首の付け根を腰の横にあて首を少し左に傾けている。

「話は聞いたわ」

「は、はい」

ヴァシヨクはドギマギしながら彼女に応える。

「私と結婚したいそうね」

「え、ええ」

「彼は震えていた。

「その通りです」

「さつきケツアルさんからもらった契約書だけれど」「はい」

「私を心から愛してくれる人ってあるわね」

「ええ」

「それは誰なのかな、って思つたけれど君だったのね」「駄目でしょうか」

「そうね」「駄目でしょ」

「エスメラダはこゝでくすりと思わせぶりに微笑んだ。

「一つ私からも聞きたいんだくれど」「何ですか？」

「もし駄目つて言つたらどうするの？」

「それは・・・・・・」

ヴァシヨクはそれを聞いただけで泣きそつた顔になつた。

「言わないで下さい、そんなことは」

「じゃあもう決つたわね」

エスメラダはそう言つてにこりと微笑んだ。

「私が結婚相手に求める条件はね」「はい」

ヴァシヨクは顔を思いきりエスメラダに近づけてきた。それだけでもう首がちぎれそうである。

「一つだけなの」

「一つだけ」

「そうよ。私を愛してくれているかどうか」「えつ」

それを聞いて声がうわづつた。

「それは一体

「聞こえなかつたかしら。愛しているかどうか、私が必要なのはそれだけ。ヴァシェク、貴方はどうなの？」

「どうなのって言われても」

内気なヴァシェクはまじまじしている。

第二幕その八

「あの、その」
「私を愛しているの？どうなの？」
「答えていいんですか」
「私は答えが聞きたいの。まあ早く」
「それなら」
ヴァーシュエクは意を決した。そして言った。
「先生が好きです。この世で一番好きです」「本当に？」
「僕が嘘を言つたことがありますか？」
それがヴァーシュエクの取り得の一つであった。
「先生もそれをよく御存知だと思いますけれど」「まあね」
エスメラダはまた悪戯っぽく笑つた。
「だからここに来ているのだし。貴方が正直なのは皆知つてゐるわ」「はい」
「じゃあ決まりね。ヴァーシュエク」「は、はい」
「貴方と結婚するわ。仲介屋さん、それでいいかしら」「私の方は」
ケツァルはにこやかに頷いた。
「お金が入るのなら。例え火の中水の中」「そういうことね」「三〇〇グルデンも戻つたし。しかしですな」「何か」
クルシナが彼に問う。
「よくよく考えれば」「はい」

「私は今回ただ働きなのでは?二〇〇グルテンにしる元々はイエーク君に払つたものですし」

「そういえば」

「その二〇〇グルテンにしても

「何があるのですか?」

「ミーハさんからのお金です。結局私は今回一文の得もしていないのではないかと思いましてね」

「いや、それは間違いですよ」

「(こ)でイエニークが前に出てそう言つた。

「君に言われても納得しないよ」

「まあそう仰らすに」

不機嫌な顔を作つてみせるケツアルにあえて笑顔でそう返す。

「お金は大事ですよね」

「それは何度も言つています」

「けれどよく考えて下さい」

「考えるとお金が出ますか?なら幾らでも考えますよ」

「いや、お金から離れて」

「お金から離れると私のおつかない妻が臉に浮かんできます」

ケツアルはさらに不機嫌になつた。

「それだけは勘弁願いたいですな」

「奥さんだけですか?」

「まさか」

ケツアルはイエニークの言葉を一笑に付した。

「こう見えても私には子供がありましてね」

「ほう」

「初耳ですね」

クルシナもミーハもそれに驚いているようだ。

「子供達の姿も思い浮かびます。そしてその子供達に温かいシチュエーを作つてやつている心優しいわたしの妻」

「そう、それです」

そこまで聞いたイエニーグが声をあげた。

「えつ」

「お子さんにシチューを作つてあげているのは貴方の奥さんですね」

「ええ」

「それですよ。何だ、ちゃんと奥さんを大事に思つていいんじゃないですか」

「ですか」

「むむむ」

「自分の心に嘘はつけませんよ。違いますか」

「確かに」

「ケツアルさん、あえて言います」

「はい」

「お金は確かに大事です。けれどそれは実はあまり重要ではない」

「頭さえ使えば手に入れられるからね」

「ああ」

マジエンカの言葉に頷く。

「けれど愛はそうはいかない」

「ええ」

「愛は簡単には手に入らない。そしてそれを手に入れられる者は」

「本当に幸せな人なんだ」

ヴァシェクが言つ。その隣にはエスマラダがいる。

「その幸せを手に入れたならば」

「絶対に手放してはならん」

クルシナとミーハが言つ。

「罰が当たるわよ」

ルドミラとハーダも。ハーダも息子の結婚が決まりホッとしていた。彼女もまた母親であることには変わりはない。その彼女がイエニーグに声をかけてきた。

「イエニーグ」

「何」

「ヴァシェクのことだけれどね」

「うん」

「有り難うね。おかげでほつとしたよ」

「弟だからね」

「弟」

「そうや」

イエニーグはそれに答えた。

「弟の為なら一肌脱ぐさ。それが兄だからね」

「兄なのかい」

「じゃあ僕はヴァシエクの何なんだい？」

「いや」

ハーダは口もつた。

「それじゃああたしは一体何になるのか。あんたを追い出したあた
しは」

「お母さんさ」

イエニーグはこやかに笑つてそう答えた。

「過去は色々あつたけれど。貴女は僕にとつてお母さんだよ」

「そう言つてくれるのかい？」

「うん」

彼はこやかな顔で頷いた。

「あらためて言わせてもらひつよ、母さん」

「・・・・・・・・」

ハーダはそれを聞いて何も言えなかつた。今までの自分のあさま
しい行動が後悔となつて全身を打ち据える。それでもう耐えられな
い程であつた。

何も言えなかつた。ただ涙だけが出る。それにリーハがやつて來
た。

「いいんだよ、もつ」

彼は妻に対し優しい声でそう語り掛けた。

「わかつたのなら。わかればいいんだ」

「そうなの」

ハーハは泣きながらそれに応えた。

「わかれればいいのね」

「ああ」

ミーハはまた言った。

「イエニーーク」

ミーハはイエニーークに対し顔を向けた。

「お帰り」

「只今」

こうして彼等は親子に戻った。皆それを温かい目で見ていた。

「さて、と」

ここでケツアルがまた動いた。

「それでは皆さん、早速はじめますか」

「何をですか」

「決まつていいではないですか、結婚式です」

彼はにこやかに笑つてそう答えた。

「一組の若者達の。場所は村の教会で」

「それが終われば酒場で祝杯を」

「そうです。如何ですか」

「喜んで。では行きますか」

「ええ。それでは」

村人達も動きはじめた。そしてイエニーークとマジジョンカ、ヴァン
エクとエスマラダを取り囲んだ。

「主役達もおいで」

「はい！」

彼等もその中に入った。彼等の親達も。こうして一時の騒ぎが終
わり祝福の時が來るのであつた。

2
0
0
5
•
6
•
2
3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3587f/>

売られた花嫁

2011年4月28日00時40分発行